



平成22年度

グローバルCOEプログラム

Global COE (Center of Excellence) Program

文部科学省

独立行政法人日本学術振興会

目 次

グローバルCOEプログラムについて

| | |
|-------------------------|----|
| 事業の目的・概要 | 2 |
| 審査の概要 | 4 |
| 「グローバルCOEプログラム」の成果 | 6 |
| 中間評価の概要 | 7 |
| 中間評価における分野別総括評価 | 8 |
| | |
| <参考1> 採択拠点一覧 | 9 |
| 平成19年度採択 | 9 |
| 平成20年度採択 | 14 |
| 平成21年度採択 | 19 |
| | |
| <参考2> 採択拠点における個別具体例について | 20 |
| 平成19年度採択 | 20 |
| 平成20年度採択 | 25 |
| 平成21年度採択 | 30 |

事業の目的・概要

■事業の背景・目的

我が国の大学が、世界トップレベルの大学と伍して教育及び研究活動を行っていくためには、

第三者評価に基づく競争原理により競争的環境を一層醸成し、国公私立大学を通じた大学間の競い合いがより活発に行われることが重要であることから、文部科学省においては、大学の構造改革の一環として、平成14年度から、世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援し、もって国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを目指す「21世紀COEプログラム」を実施しました。

「21世紀COEプログラム」により、大学改革の推進、優れた若手研究者の育成、新たな学問分野の開拓や研究水準の向上などが図られてきましたが、知識基盤社会、グローバル化の進展のなかで、国際的に第一級の力量をもつ研究者の育成は益々その重要性を増しており、平成17年9月の中央教育審議会答申「新時代の大学院教育」や平成18年3月に閣議決定された「科学技術基本計画」においても、より充実・発展させた形でポスト「21世紀COEプログラム」を実現することが必要であるとされました。

グローバルCOEプログラムは、

平成14年度から文部科学省において開始された「21世紀COEプログラム」の評価・検証を踏まえ、その基本的な考え方を継承しつつ、我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、国際的に卓越した研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、もって、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的としています。

■事業概要

予 算：平成22年度 265億円（平成21年度 342億円）

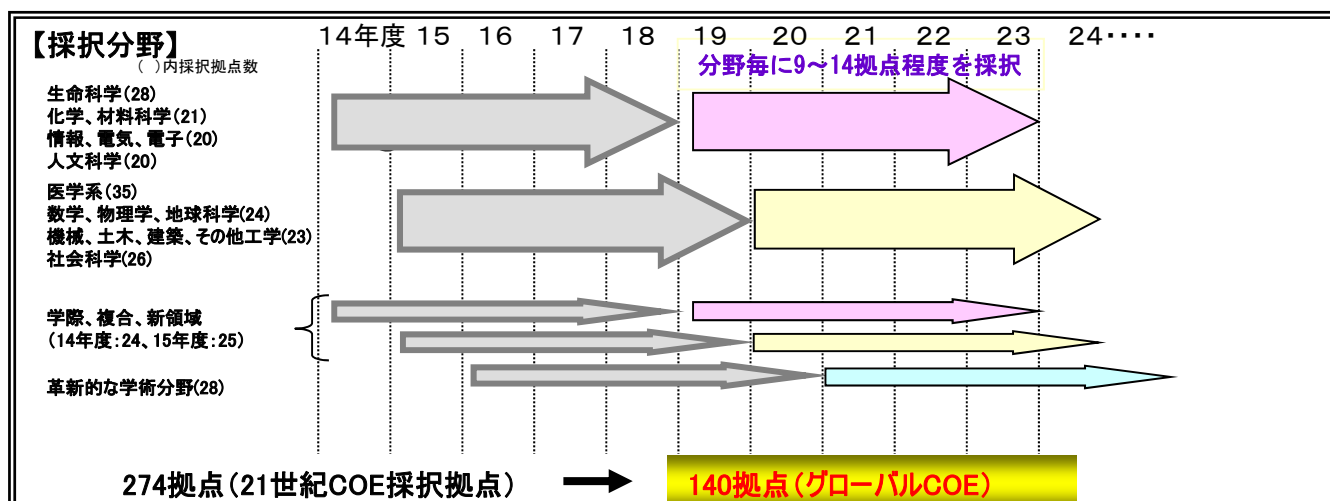
公募対象：大学院（博士課程）レベルの専攻、大学附置の研究所、研究センター等

公募範囲：学際、複合、新領域を含めたすべての学問分野

事業規模：原則5千万～5億円程度／年

採 択 数：分野毎に9～14拠点程度／年

評 価：事業開始2年経過後に中間評価、事業期間終了後に事後評価を実施



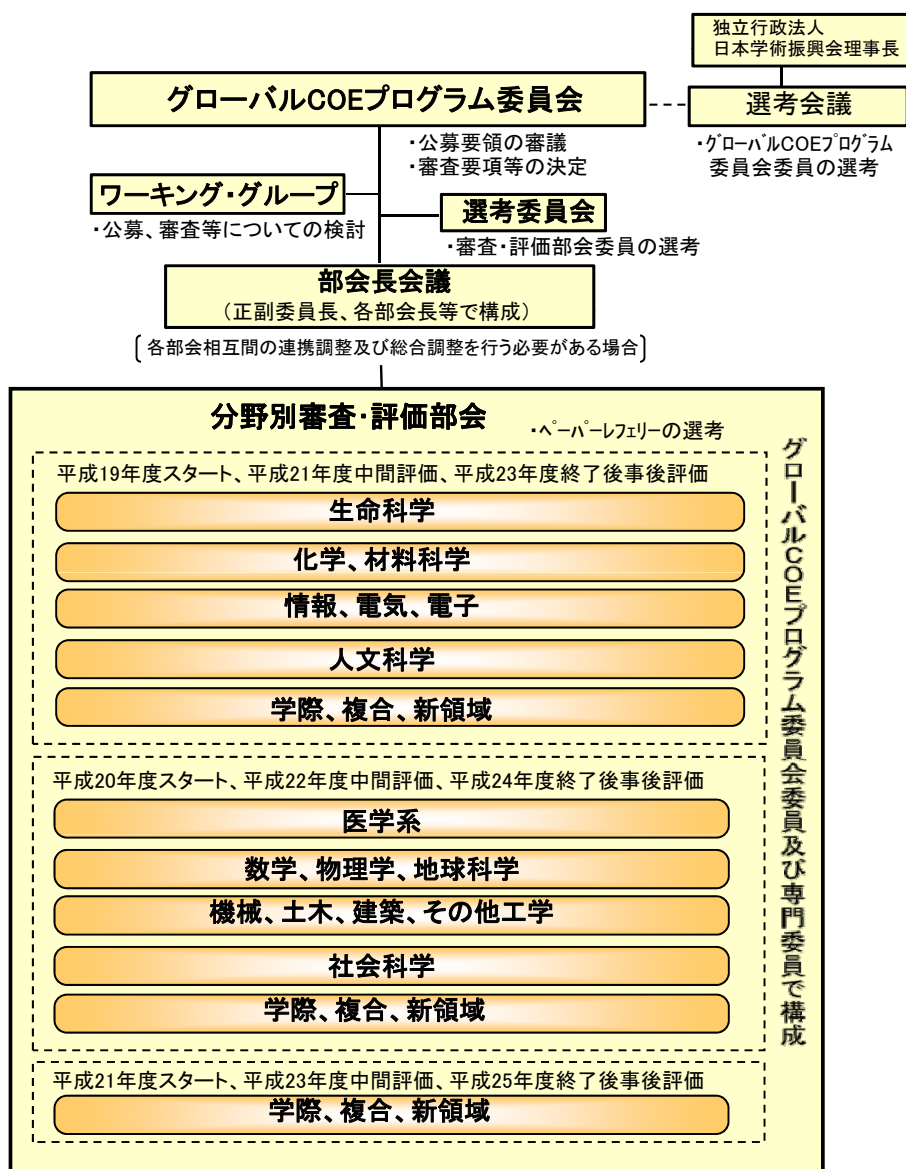
■特徴

大学の構造改革の一貫として、平成14年度から、世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援するために開始された「21世紀COEプログラム」の基本的な考え方を継承しつつ、国際的に卓越した教育研究拠点の形成という目的を踏まえ、以下の点を充実・強化しています。

- ① 1拠点当たりの支援を重点化し、支援経費を増額
- ② 博士課程学生をはじめとする若手研究者に対する経済的支援の充実
- ③ 国際競争力を評価するための審査・評価体制の強化（外国人レフェリーによる審査の実施）
- ④ 国内外の大学・研究機関と連携した取組を対象に追加

■審査体制

独立行政法人日本学術振興会にグローバルCOEプログラム委員会（独立行政法人大学評価・学位授与機構、日本私立学校振興・共済事業団、財団法人大学基準協会の協力により運営）を設置し、審査・評価を実施しています。

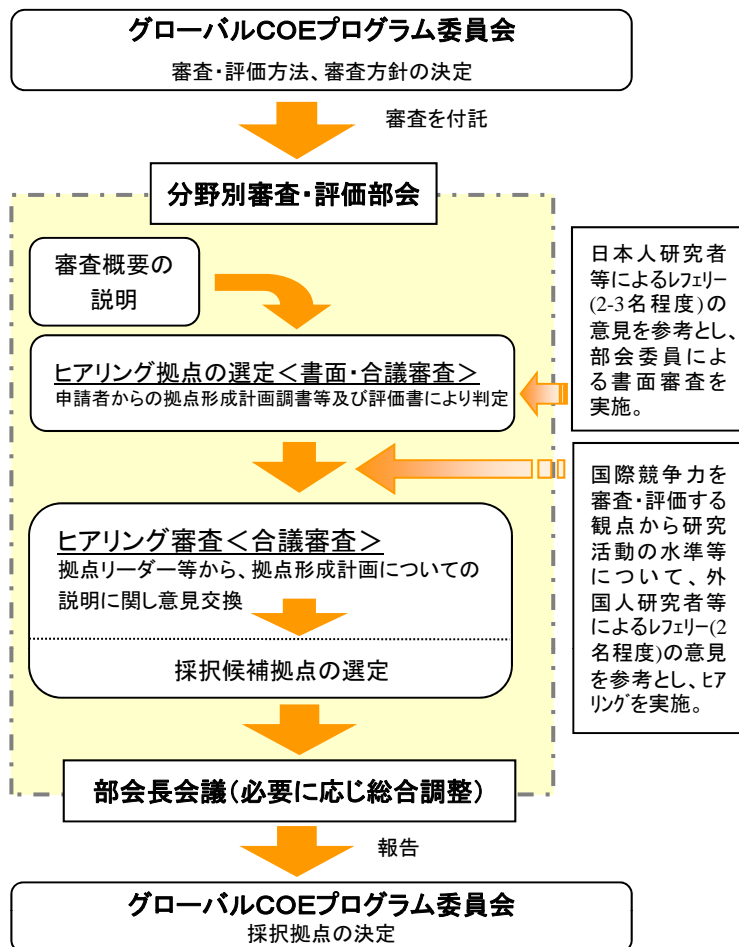


審査の概要

■ 審査の視点(平成21年度の場合)

- 1.学長を中心としたマネジメント体制による指導力の下、大学の特色を踏まえた将来計画と強い実行力により、国際的に卓越した教育研究拠点を形成する計画であること。
- 2.このグローバルCOEプログラムで行う原則5年間の事業が終了した後も、国際的に卓越した教育研究拠点としての継続的な教育研究活動が自主的・恒常的に行われることが期待できる計画であること。
- 3.研究プロジェクトではなく、国際的に優れた研究基盤や特色ある学問分野の開拓を通じた独創的、画期的な研究基盤を前提に、高度な研究能力を有する人材育成の機能を持つ教育研究拠点(人材養成の場)を形成するものであって、将来の発展性が見込まれる計画であること。
- 4.特に学際、複合、新領域分野については、例えば、将来的に研究科及び専攻の再編などの組織改革及びカリキュラム改革につながるなど、発展性が考えられる計画であること。
(1~4の内容はいずれもの条件を満たすこと)
- 5.21世紀COEプログラムに採択されている拠点については、21世紀COEプログラムで期待された成果が十分に得られていること。
- 6.他の大学等(国内外の研究機関を含む。)との連携による取組みについては、拠点となる大学及び将来的な拠点構想が明確となっており、その連携が拠点形成に必要不可欠であること。

■ 審査手順



■ 公募分野

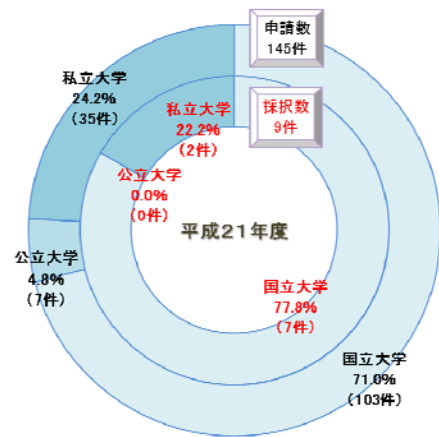
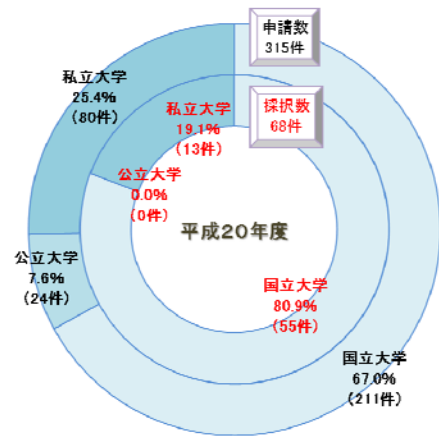
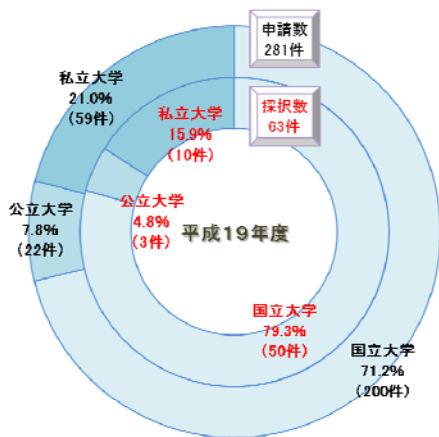
| 年度 | 分野 | 分野の例示(下注参照) |
|-----------------------|--------------------|--|
| 平成19年度 | 生命科学 | 生物学、農学、薬学 等、 その他「生命科学」を主とする複合分野 |
| | 化学、材料科学 | 化学、材料科学、金属工学、プロセス工学 等、 その他「化学、材料科学」を主とする複合分野 |
| | 情報、電気、電子 | 情報学、システム、ソフトウェア、材料・デバイス、電気通信工学 等、 その他「情報、電気、電子」を主とする複合分野 |
| | 人文科学 | 哲学、文学、言語学、史学、人文地理学、文化人類学、心理学、教育学、芸術 等、 その他「人文科学」を主とする複合分野 |
| 平成20年度 | 医学系 | 医学、歯学、看護学、保健学 等 その他「医学系」を主とする複合分野 |
| | 数学、物理学、地球科学 | 数学、基礎物理学、応用物理学、天文学、地球惑星科学 等、 その他「数学、物理学、地球科学」を主とする複合分野 |
| | 機械、土木、建築、 その他工学 | 機械工学、土木工学、建築学 等、 その他「機械、土木、建築、その他工学」を主とする複合分野 |
| | 社会科学 | 法学、政治学、経済学、経営学、社会学 等、 その他「社会科学」を主とする複合分野 |
| 平成19年度 ～ 平成21年度 | 学際、複合、新領域 | 医工学、生活科学、環境学、エネルギー科学、地域研究 等 「人文科学」と「生命科学」など、上記公募分野の2つ以上にまたがるような複合分野 (1分野を主とする複合分野を除く) 新たな領域 |

(注) 分野の範囲は、各分野の広がりイメージするための参考として記載しているものであり、これらに限定したり、当該分野を固定化することや、分野の融合を妨げる趣旨ではありません。

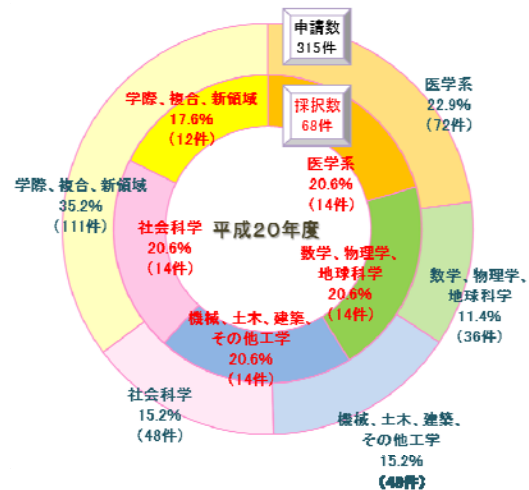
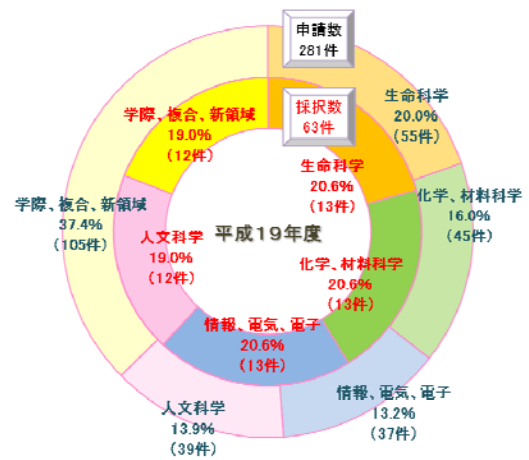
■グローバルCOEプログラム 分野別申請・採択状況

| | | | | | |
|--------|------------------------------|-------------------------|----------------------------|--------------|-------------------|
| 平成19年度 | 採択件数:28大学63件(申請件数:111大学281件) | | | | |
| | 生命科学: 13件 | 化学・材料科学: 13件 | 情報、電気、電子: 13件 | 人文科学: 12件 | 学際、複合、新領域: 12件 |
| 平成20年度 | 採択件数:29大学68件(申請件数:130大学315件) | | | | |
| | 医学系: 14件 | 数学、物理学、 地球科学: 14件 | 機械、土木、建築、 その他工学: 14件 | 社会科学: 14件 | 学際、複合、新領域: 12件 |
| 平成21年度 | 採択件数:9大学9件(申請件数:85大学145件) | | | | |
| | 学際、複合、新領域: 9件 | | | | |
| 総計 | 41大学140件(申請件数:153大学741件) | | | | |

国公私別申請・採択状況



分野別申請・採択状況



「グローバルCOEプログラム」の成果

平成19、20年度採択131拠点における採択前と採択2年後（中間評価時点）の2カ年の指標の推移
（平成19年度採択63拠点は18→20年度、平成20年度採択68拠点は19→21年度のデータ）

拠点の**研究力**に関する指標

- **拠点が実施する共同研究数** 16,266件 → 20,676件 (4,410件増、27.1%増)
- **うち、海外との共同研究数** 3,221件 → 4,241件 (1,020件増、31.7%増)
- **事業推進担当者の国際学会での基調・招待講演回数**
4,073回 → 4,846回 (773回増、19.0%増)
- **事業推進担当者のレフェリー付論文発表数**
15,837本 → 16,380本 (543本増、3.4%増)
- **うち、Web of Scienceへの収録が判明している論文数**
11,033本 → 11,399本 (366本増、3.3%増)

※ 我が国の大学・研究機関が生産するWeb of Science収録論文総数は年間7万本

拠点の**教育力**に関する指標

- **拠点に所属する博士(後期)学生の就職率** 81.6% → 84.9% (3.3%増)
(*)
※ 我が国全体における博士課程修了者の就職率は62.0% (平成21年度修了者 (学校基本調査))
- **拠点に所属する博士(後期)学生のうち、RA受給者数** 2,135人 → 3,309人 (1,174人増、55.0%増)
(*)
※ 中核専攻以外からプロジェクトに参画する者も含めると、GCOE補助金で、約5,000人の優れた博士(後期)学生RAと、約1,000人の優れたポスドク研究員を雇用
- **拠点に所属する博士(後期)学生の海外での学会発表数** 3,809回 → 5,073回 (1,264回増、33.2%増)
(*)
- **拠点に所属する博士(後期)学生のレフェリー付論文発表数** 4,961本 → 5,903本 (942本増、19.0%増)
(*)
- **うち、Web of Scienceへの収録が判明している論文数** 3,222本 → 3,964本 (742本増、23.0%増)

(*) 事業推進担当者が指導教員となっている者

(文部科学省調べ)

中間評価の概要

■ 評価の目的

本事業では、事業の進捗状況等を専門家や有識者により確認し、事業の効果的な実施を図り、拠点形成の目的が十分達成されるよう適切な助言を行うとともに、国際的に卓越した教育研究拠点として真に将来の発展が見込まれるかを評価し、その結果に基づいて補助金の適正配分等に資することを目的に、中間評価を実施します。

■ 評価の時期

各教育研究拠点の補助事業について、開始から2年経過後

■ 評価項目

① 運営状況

[大学の将来構想と組織的な支援]

- 大学全体の将来構想において、拠点形成計画が十分戦略的なものとして位置づけられ、機能しているか
- 学長を中心としたマネジメント体制の下、国際的に卓越した教育研究拠点形成への重点的取組みが行われているか

[拠点形成全体]

- 国際的に卓越した教育研究拠点形成計画全体の当初目的に沿って、計画は着実に進展しているか
- 拠点形成のための運営マネジメント体制が生まれ、拠点として機能しているか
- 国際競争力のある大学づくりに資するための取組みを行っているか
- 他の大学等と連携した取組みについては、拠点形成において、その連携が必要不可欠なものとして有効に機能しているか

● 人材育成面

- 学生が将来、有為な人材として活躍できるよう、必要な指導体制、教育プログラム等を措置し、機能しているか
- 若手研究者がその能力を十分に発揮できるような仕組みを措置し、機能しているか
- 国際的に活躍できる人材を育成するための工夫をし、機能しているか
- 他の大学等と連携した取組みについては、連携が有効に機能しているか

[補助金の適切かつ効果的使用]

② グローバルCOEプログラム委員会の審査結果による留意事項への対応

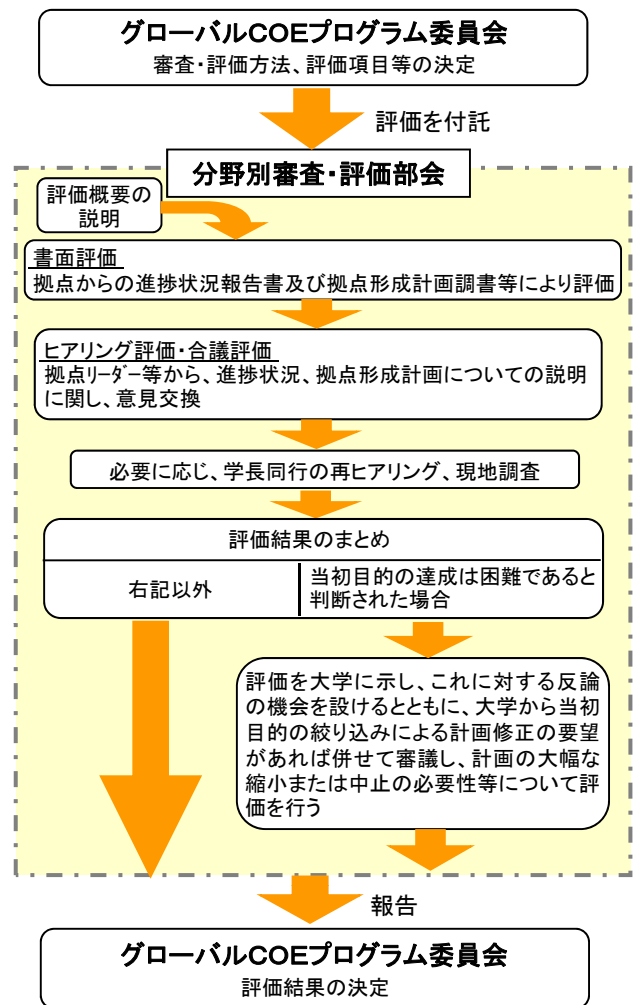
③ 今後の展望

- 今後、拠点形成を進める上で改善点を検討し、適切で、妥当な改善を期待できるか
- COEとして、研究を通じた人材育成の評価、国際的評価、国内の関連する学会での評価、産学官連携の視点からの評価、社会貢献等が期待できるか
- 補助事業が終了した後も、国際的に卓越した教育研究拠点としての継続的な教育研究活動が自主的・恒常的に行われるための具体的な支援を考慮しているか、または、すでに着手しているか
- 他の大学等と連携した取組みについては、事業終了後の連携のあり方等について、考慮されているか

④ その他

- 学内外に対しどのようなインパクト等を与えたか

■ 評価手順



● 研究活動面

- 国際的な研究活動が実施されているか、または、我が国固有の分野もしくは、諸外国に例を見ない独創的な研究アプローチで、諸外国に積極的な情報発信が行われているか
- 拠点形成計画に参画した研究者が、実質的に協力・連携し、拠点形成に向けて十分貢献できる体制となっているか
- 研究活動において、新たな学術的知見の創出や特筆すべきことがあったか
- 他の大学等と連携した取組みについては、連携が有効に機能しているか

中間評価における分野別総括評価

| 19年度採択拠点 総括評価 | 生命科学 | 化学、 材料科学 | 情報、電気、 電子 | 人文科学 | 学際、複合、 新領域 | 5分野 |
|--|-----------|-------------|--------------|-----------|---------------|-----------|
| | 件 | 件 | 件 | 件 | 件 | 件 |
| 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。 | 11 | 10 | 8 | 8 | 5 | 42 |
| 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。 | 2 | 3 | 5 | 4 | 7 | 21 |
| 計 | 13 | 13 | 13 | 12 | 12 | 63 |

| 20年度採択拠点 総括評価 | 医学系 | 数学、物理 学、地球 科学 | 機械、土木、 建築、その 他工学 | 社会科学 | 学際、複合、 新領域 | 5分野 |
|---|-----------|---------------------|------------------------|-----------|---------------|-----------|
| | 件 | 件 | 件 | 件 | 件 | 件 |
| 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。 | 12 | 13 | 8 | 8 | 6 | 47 |
| 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。 | 1 | 1 | 5 | 6 | 4 | 17 |
| このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の適切な変更が必要と判断される。 | 1 | 0 | 1 | 0 | 2 | 4 |
| 計 | 14 | 14 | 14 | 14 | 12 | 68 |

※ 「現在までの進捗状況等に鑑み、今後の努力を待っても当初目的の達成は困難と思われるので、拠点形成を継続するためには、助言等に沿って、当初目的を絞り込んだ上で当初計画を大幅に縮小することが必要と判断される」「現在までの進捗状況に鑑み、今後の努力を待っても当初目的の達成は困難と思われるので、拠点形成を中止することが必要と判断される」とされた拠点はなし。

＜参考1＞ 採択拠点一覧

* 機関名、専攻等名、拠点リーダー名は平成22年10月現在

平成19年度採択【分野名：生命科学】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 11件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|---------------|-------------------------|---------|--|
| A01 | 脳神経科学を社会へ還流する教育研究拠点 | 東北大学 | 医学系研究科 医科学専攻 | 大隅 典子 | |
| A02 | 生体調節シグナルの統合的研究 | 群馬大学 | 生体調節研究所 | 小島 至 | 秋田大学 |
| A03 | 生体シグナルを基盤とする統合生命科学 | 東京大学 | 医学系研究科 機能生物学専攻 | 宮下 保司 | |
| A04 | 生命時空間ネットワーク進化型教育研究拠点 | 東京工業大学 | 生命理工学研究科 生命情報専攻 | 徳永 万喜洋 | 東京医科歯科大学、独立行政法人理化学研究所、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(アメリカ)、スクリプス研究所(アメリカ)、国立科学研究センター(フランス) |
| A05 | システム生命科学の展開: 生命機能の設計 | 名古屋大学 | 理学研究科 生命理学専攻 | 近藤 孝男 | |
| A06 | 生物の多様性と進化研究のための拠点形成 | 京都大学 | 理学研究科 生物科学専攻 | 阿形 清和 | |
| A07 | 高次生命機能システムのダイナミクス | 大阪大学 | 生命機能研究科 生命機能専攻 | 柳田 敏雄 | |
| A08 | 統合的膜生物学の国際教育研究拠点 | 神戸大学 | 医学研究科 医科学専攻 | 片岡 徹 | |
| A09 | フロンティア生命科学グローバルプログラム | 奈良先端科学技術大学院大学 | バイオサイエンス研究科 分子生物学専攻 | 島本 功 | |
| A10 | 個体恒常性を担う細胞運命の決定とその破綻 | 九州大学 | システム生命科学府 システム生命科学専攻 | 藤木 幸夫 | |
| A13 | In vivoヒト代謝システム生物学拠点 | 慶應義塾大学 | 医学研究科 医学研究系専攻 | 末松 誠 | カロリンスカ研究所(スウェーデン)、ジョンズホプキンス大学(アメリカ)、ボストン大学(アメリカ)、ペンシルバニア大学(アメリカ) |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 2件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|-------------------|---------|-----------|
| A11 | 細胞系譜制御研究の国際的人材育成ユニット | 熊本大学 | 発生医学研究所 | 桑 昭苑 | |
| A12 | ピコバイオロジー: 原子レベルの生命科学 | 兵庫県立大学 | 生命理学研究科 生命科学専攻 | 吉川 信也 | |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成19年度採択【分野名：化学、材料科学】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 10件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|----------------------------|---------|--------------|
| B03 | 材料インテグレーション国際教育研究拠点 | 東北大学 | 金属材料研究所 | 後藤 孝 | |
| B04 | 理工連携による化学イノベーション | 東京大学 | 理学系研究科 化学専攻 | 中村 栄一 | |
| B06 | 新たな分子化学創発を目指す教育研究拠点 | 東京工業大学 | 理工学研究科 化学専攻 | 鈴木 啓介 | 独立行政法人理化学研究所 |
| B07 | 国際ファイバー工学教育研究拠点 | 信州大学 | 総合工学系研究科 生命機能・ファイバー工学専攻 | 平井 利博 | |
| B08 | 分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成 | 名古屋大学 | 理学研究科 物質理学専攻(化学系) | 渡辺 芳人 | |
| B09 | 物質科学の新基盤構築と次世代育成国際拠点 | 京都大学 | 工学研究科 高分子化学専攻 | 澤本 光男 | |
| B10 | 生命環境化学グローバル教育研究拠点 | 大阪大学 | 工学研究科 生命先端工学専攻 | 福住 俊一 | |
| B11 | 構造・機能先進材料デザイン教育研究拠点 | 大阪大学 | 工学研究科 マテリアル生産科学専攻 | 掛下 知行 | |
| B12 | 未来分子システム科学 | 九州大学 | 工学府 物質創造工学専攻 | 君塚 信夫 | |
| B13 | 「実践的的化学知」教育研究拠点 | 早稲田大学 | 先進理工学研究科 応用化学専攻 | 黒田 一幸 | |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 3件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|---------------------|--------|----------------------|---------|--|
| B01 | 触媒が先導する物質科学イノベーション | 北海道大学 | 工学研究院 有機プロセス工学部門 | 宮浦 憲夫 | |
| B02 | 分子系高次構造体化学国際教育研究拠点 | 東北大学 | 理学研究科 化学専攻 | 山口 雅彦 | |
| B05 | 材料イノベーションのための教育研究拠点 | 東京工業大学 | 理工学研究科 有機・高分子物質専攻 | 竹添 秀男 | 独立行政法人産業技術総合研究所、独立行政法人物質・材料研究機構光触媒材料センター |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成19年度採択【分野名：情報、電気、電子】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される：8件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|----------|--------------------------|---------|--------------------------------------|
| C01 | 知の創出を支える次世代IT基盤拠点 | 北海道大学 | 情報科学研究科 コンピュータサイエンス専攻 | 有村 博紀 | |
| C04 | セキュアライフ・エレクトロニクス | 東京大学 | 工学系研究科 電気系工学専攻 | 保立 和夫 | |
| C06 | フォトニクス集積コアエレクトロニクス | 東京工業大学 | 総合理工学研究科 物理電子システム創造専攻 | 小山 二三夫 | カリフォルニア大学バークレイ校(アメリカ)、ケンブリッジ大学(イギリス) |
| C07 | インテリジェントセンシングのフロンティア | 豊橋技術科学大学 | 工学研究科 電気・電子情報工学専攻 | 石田 誠 | |
| C08 | 知識循環社会のための情報学教育研究拠点 | 京都大学 | 情報学研究科 社会情報学専攻 | 田中 克己 | |
| C09 | 光・電子理工学の教育研究拠点形成 | 京都大学 | 工学研究科 電子工学専攻 | 野田 進 | |
| C11 | 次世代電子デバイス教育研究開発拠点 | 大阪大学 | 工学研究科 電気電子情報工学専攻 | 谷口 研二 | 福井大学 |
| C13 | アンビエントSoC教育研究の国際拠点 | 早稲田大学 | 基幹理工学研究科 情報理工学専攻 | 後藤 敏 | |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される：5件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|---------------------------|---------|--|
| C02 | 情報エレクトロニクスシステム教育研究拠点 | 東北大学 | 工学研究科 電気・通信工学専攻 | 安達 文幸 | |
| C03 | サイバニクス：人・機械・情報系の融合複合 | 筑波大学 | システム情報工学研究科 知能機能システム専攻 | 山海 嘉之 | 大阪大学 |
| C05 | 計算世界観の深化と展開 | 東京工業大学 | 情報理工学研究科 数理・計算科学専攻 | 渡辺 治 | スイス連邦工科大学チューリッヒ校(スイス)、カリフォルニア大学サンディエゴ校(アメリカ) |
| C10 | アンビエント情報社会基盤創成拠点 | 大阪大学 | 情報科学研究科 情報ネットワーク学専攻 | 村田 正幸 | |
| C12 | アクセス空間支援基盤技術の高度国際連携 | 慶應義塾大学 | 理工学研究科 総合デザイン工学専攻 | 大西 公平 | ハーバード大学(アメリカ)、西安交通大学(中国)、国立中央理工科学校リヨン校(フランス) |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成19年度採択【分野名：人文科学】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 8件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|---------------------|--------|----------------------|---------|---|
| D01 | 心の社会性に関する教育研究拠点 | 北海道大学 | 文学研究科 人間システム科学専攻 | 亀田 達也 | カリフォルニア大学サンタバーバラ校(アメリカ) |
| D02 | 死生学の展開と組織化 | 東京大学 | 人文社会系研究科 基礎文化研究専攻 | 一ノ瀬 正樹 | |
| D03 | 共生のための国際哲学教育研究センター | 東京大学 | 総合文化研究科 超域文化科学専攻 | 小林 康夫 | |
| D07 | 心が活きる教育のための国際的拠点 | 京都大学 | 教育学研究科 教育科学専攻 | 子安 増生 | |
| D08 | コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点 | 大阪大学 | 人間科学研究科 人間科学専攻 | 小泉 潤二 | |
| D09 | 論理と感性の先端的教育研究拠点形成 | 慶應義塾大学 | 社会学研究科 心理学専攻 | 渡辺 茂 | 独立行政法人理化学研究所、ケンブリッジ大学(イギリス)、ウイーン大学(オーストリア)、ビーレフェルト大学(ドイツ)、エコール・ノルマル・シュペリユール(フランス)、嘉泉医科大学(韓国)、南フロリダ大学(アメリカ)、マギル大学(カナダ) |
| D10 | 演劇・映像の国際的教育研究拠点 | 早稲田大学 | 演劇博物館 | 竹本 幹夫 | |
| D12 | 東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成 | 関西大学 | 文学研究科 文化交渉学専攻 | 陶 徳民 | |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 4件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|----------|-------------------------|---------|--------------|
| D04 | コーパスに基づく言語学教育研究拠点 | 東京外国語大学 | 総合国際学研究科 言語文化専攻 | 峰岸 真琴 | |
| D05 | 格差センシティブな人間発達科学の創成 | お茶の水女子大学 | 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻 | 耳塚 寛明 | |
| D06 | テキスト布置の解釈学的研究と教育 | 名古屋大学 | 文学研究科 人文学専攻 | 佐藤 彰一 | |
| D11 | 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 | 立命館大学 | アート・リサーチセンター | 赤間 亮 | ロンドン大学(イギリス) |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成19年度採択【分野名:学際、複合、新領域】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 5件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|------|------------------------|---------|--------------------------------|
| E02 | 世界を先導する原子力教育研究イニシアチブ | 東京大学 | 工学系研究科 原子力国際専攻 | 田中 知 | |
| E04 | 生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点 | 京都大学 | 東南アジア研究所 | 杉原 薫 | |
| E06 | 乾燥地科学拠点の世界展開 | 鳥取大学 | 乾燥地研究センター | 恒川 篤史 | 砂漠研究所(アメリカ)、国際乾燥地農業研究センター(シリア) |
| E07 | 化学物質の環境科学教育研究拠点 | 愛媛大学 | 沿岸環境科学研究センター | 田辺 信介 | |
| E08 | 放射線健康リスク制御国際戦略拠点 | 長崎大学 | 医歯薬学総合研究科 放射線医療科学専攻 | 山下 俊一 | |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 7件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|-----------------------|---------|---------------|
| E01 | 新世紀世界の成長焦点に築くナノ医工学拠点 | 東北大学 | 医工学研究科 医工学専攻 | 山口 隆美 | |
| E03 | アジア視点の国際生態リスクマネジメント | 横浜国立大学 | 環境情報研究院 自然環境と情報部門 | 松田 裕之 | 独立行政法人国立環境研究所 |
| E05 | 医・工・情報学融合による予測医学基盤創成 | 大阪大学 | 臨床医工学融合研究教育センター | 野村 泰伸 | |
| E09 | 健康長寿科学教育研究の戦略的新展開 | 静岡県立大学 | 生活健康科学研究科 食品栄養科学専攻 | 今井 康之 | |
| E10 | 文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築 | 大阪市立大学 | 都市研究プラザ | 佐々木 雅幸 | |
| E11 | アジア地域統合のための世界的人材育成拠点 | 早稲田大学 | アジア太平洋研究科 国際関係学専攻 | 天児 慧 | |
| E12 | 「生存学」創成拠点 | 立命館大学 | 先端総合学術研究科 先端総合学術専攻 | 立岩 真也 | |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成20年度採択【分野名:医学系】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 12件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|----------|--------------------------|---------|---|
| F01 | 人獣共通感染症国際共同教育研究拠点の創成 | 北海道大学 | 獣医学研究科 獣医学専攻 | 喜田 宏 | |
| F02 | Network Medicine創生拠点 | 東北大学 | 医学系研究科 医科学専攻 | 岡 芳知 | 財団法人癌研究会癌研究所、シンガポール大学(シンガポール) |
| F04 | 免疫システム統御治療学の国際教育研究拠点 | 千葉大学 | 医学薬学府 先端生命科学専攻 | 中山 俊憲 | 独立行政法人理化学研究所、独立行政法人放射線医学総合研究所 |
| F05 | 疾患のケミカルバイオロジー教育研究拠点 | 東京大学 | 医学系研究科 内科学専攻 | 門脇 孝 | |
| F06 | ゲノム情報に基づく先端医療の教育研究拠点 | 東京大学 | 医科学研究所ヒトゲノム解析センター | 清木 元治 | |
| F07 | 歯と骨の分子疾患科学の国際教育研究拠点 | 東京医科歯科大学 | 医歯学総合研究科 器官システム制御学系専攻 | 野田 政樹 | |
| F08 | 機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点 | 名古屋大学 | 医学系研究科 細胞情報医学専攻 | 祖父江 元 | |
| F09 | 生命原理の解明を基とする医学研究教育拠点 | 京都大学 | 医学研究科 医学専攻 | 成宮 周 | |
| F10 | オルガネラネットワーク医学創成プログラム | 大阪大学 | 医学系研究科 予防環境医学専攻 | 米田 悦啓 | 独立行政法人理化学研究所 |
| F11 | 次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点 | 神戸大学 | 医学研究科 医科学専攻 | 東 健 | |
| F13 | エイズ制圧を目指した国際教育研究拠点 | 熊本大学 | エイズ学研究センター | 満屋 裕明 | |
| F14 | 幹細胞医学のための教育研究拠点 | 慶應義塾大学 | 医学研究科 医学研究系専攻 | 岡野 栄之 | 財団法人実験動物中央研究所、国立成育医療研究センター、 Lund大学(スウェーデン)、テキサス大学M.D.アンダーソンがんセンター(アメリカ)、カリフォルニア大学アーバイン校(アメリカ) |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 1件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|------|-----------|---------|-----------|
| F12 | 熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略 | 長崎大学 | 熱帯医学研究所 | 平山 謙二 | |

(中間評価結果) このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の適切な変更が必要と判断される: 1件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|------|----------------|---------|-----------|
| F03 | 分子疫学の国際教育研究ネットワークの構築 | 山形大学 | 医学系研究科 医学専攻 | 山下 英俊 | |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成20年度採択【分野名:数学、物理学、地球科学】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 13件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|----------------------|---------|--|
| G01 | 物質階層を紡ぐ科学フロンティアの新展開 | 東北大学 | 理学研究科 物理学専攻 | 井上 邦雄 | |
| G02 | 変動地球惑星学の統合教育研究拠点 | 東北大学 | 理学研究科 地学専攻 | 大谷 栄治 | |
| G03 | 有機エレクトロニクス高度化スクール | 千葉大学 | 融合科学研究科 ナノサイエンス専攻 | 上野 信雄 | |
| G04 | 未来を拓く物理科学結集教育研究拠点 | 東京大学 | 工学系研究科 物理工学専攻 | 樽茶 清悟 | |
| G05 | 数学新展開の研究教育拠点 | 東京大学 | 数理科学研究科 数理科学専攻 | 川又 雄二郎 | |
| G06 | ナノサイエンスを拓く量子物理学拠点 | 東京工業大学 | 理工学研究科 物性物理学専攻 | 斎藤 晋 | カリフォルニア大学バークレー校(アメリカ) |
| G07 | 宇宙基礎原理の探求 | 名古屋大学 | 理学研究科 素粒子宇宙物理学専攻 | 杉山 直 | |
| G08 | 数学のトップリーダーの育成 | 京都大学 | 理学研究科 数学・数理解析専攻 | 深谷 賢治 | |
| G09 | 普遍性と創発性から紡ぐ次世代物理学 | 京都大学 | 理学研究科 物理学・宇宙物理学専攻 | 川合 光 | |
| G10 | 物質の量子機能解明と未来型機能材料創出 | 大阪大学 | 基礎工学研究科 物質創成専攻 | 北岡 良雄 | 独立行政法人情報通信研究機構 |
| G12 | 先進的実験と理論による地球深部物質学拠点 | 愛媛大学 | 地球深部ダイナミクス研究センター | 入船 徹男 | 財団法人高輝度光科学研究センター、東京大学、ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校(アメリカ) |
| G13 | マス・フォア・インダストリー教育研究拠点 | 九州大学 | 数理学府 数理学専攻 | 若山 正人 | 神戸大学 |
| G14 | 現象数理学の形成と発展 | 明治大学 | 先端数理科学 インスティテュート | 三村 昌泰 | 広島大学 |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 1件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|-----------------|------|-------------------|---------|-----------|
| G11 | 惑星科学国際教育研究拠点の構築 | 神戸大学 | 理学研究科 地球惑星科学専攻 | 中川 義次 | 北海道大学 |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成20年度採択【分野名：機械、土木、建築、その他工学】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 8件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|------------------------------|---------|---|
| H01 | 流動ダイナミクス知の融合教育研究世界拠点 | 東北大学 | 流体科学研究所 | 圓山 重直 | |
| H02 | 都市空間の持続再生学の展開 | 東京大学 | 工学系研究科 都市工学専攻 | 藤野 陽三 | |
| H03 | 機械システム・イノベーション国際拠点 | 東京大学 | 工学系研究科 機械工学専攻 | 光石 衛 | |
| H06 | マイクロ・ナノメカトロニクス教育研究拠点 | 名古屋大学 | 工学研究科 マイクロ・ナノシステム 工学専攻 | 福田 敏男 | カリフォルニア大学ロサンゼルス校(アメリカ) |
| H07 | アジア・メガンティの人間安全保障工学拠点 | 京都大学 | 工学研究科 都市環境工学専攻 | 松岡 譲 | |
| H08 | 高機能化原子制御製造プロセス教育研究拠点 | 大阪大学 | 工学研究科 精密科学・応用物理学 専攻 | 山内 和人 | |
| H10 | 環境共生・安全システムデザインの先導拠点 | 慶應義塾大学 | 理工学研究科 総合デザイン工学専攻 | 前野 隆司 | マサチューセッツ工科大学(アメリカ)、産業安全文化ファンデーション(フランス) |
| H12 | グローバル ロボット アカデミア | 早稲田大学 | 創造理工学研究科 総合機械工学専攻 | 藤江 正克 | |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 5件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|-------------------------|---------|---|
| H04 | 震災メガリスク軽減の都市地震工学国際拠点 | 東京工業大学 | 理工学研究科 建築学専攻 | 時松 孝次 | 太平洋地震工学研究センター(アメリカ) |
| H05 | アジア域での流域総合水管理研究教育の展開 | 山梨大学 | 医学工学総合教育部 環境社会創生工学専攻 | 砂田 憲吾 | |
| H09 | 衝撃エネルギー工学グローバル先導拠点 | 熊本大学 | 自然科学研究科 複合新領域科学専攻 | 秋山 秀典 | |
| H13 | 風工学・教育研究のニューフロンティア | 東京工芸大学 | 工学研究科 建築学・風工学専攻 | 田村 幸雄 | ノートルダム大学(アメリカ) |
| H14 | 歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点 | 立命館大学 | 理工学研究科 総合理工学専攻 | 大窪 健之 | 独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館、明知大学校(韓国)、トリブバン大学(ネパール)、ペルー国立工科大学(ペルー) |

(中間評価結果) このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の適切なる変更が必要と判断される: 1件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|----------------------|---------|-------------|
| H11 | 先導的防災安全工学の東アジア教育研究拠点 | 東京理科大学 | 総合研究機構 防災科学研究センター | 菅原 進一 | 独立行政法人建築研究所 |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成20年度採択【分野名:社会科学】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 8件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|--------------------------|---------------|-----------------------|---------|---|
| 101 | 多元分散型統御を目指す 新世代法政策学 | 北海道大学 | 法学研究科 法律実務専攻 | 田村 善之 | |
| 105 | ものづくり経営研究セン ター アジア・ハブ | 東京大学 | 経済学研究科 経営専攻 | 藤本 隆宏 | |
| 106 | 日本企業のイノベーション | 一橋大学 | 商学研究科 経営・マーケティング専攻 | 沼上 幹 | |
| 107 | 社会科学の高度統計・実証 分析拠点構築 | 一橋大学 | 経済研究所 | 深尾 京司 | |
| 108 | 東アジアの開発戦略と国家 建設の適用可能性 | 政策研究大学院 大学 | 政策研究科 政策専攻 | 大塚 啓二郎 | |
| 109 | 親密圏と公共圏の再編成 をめざすアジア拠点 | 京都大学 | 文学研究科 行動文化学専攻 | 落合 恵美子 | |
| 110 | 人間行動と社会経済のダイ ナミクス | 大阪大学 | 経済学研究科 経済学専攻 | 大竹 文雄 | 京都大学 |
| 112 | 市民社会におけるガバナ ンスの教育研究拠点 | 慶應義塾大学 | 法学研究科 政治学専攻 | 田中 俊郎 | 延世大学校(韓国)、仁荷大学校 (韓国)、カリフォルニア大学パー クレー校(アメリカ)、ソウル国立 大学校(韓国)、東西大学校(韓 国)、国立政治大学(台湾) |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 6件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|--------------------------|--------|--------------------|---------|-----------------|
| 102 | 社会階層と不平等教育研 究拠点の世界的展開 | 東北大学 | 文学研究科 人間科学専攻 | 佐藤 嘉倫 | スタンフォード大学(アメリカ) |
| 103 | グローバル時代の男女共 同参画と多文化共生 | 東北大学 | 法学研究科 総合法制専攻 | 辻村 みよ子 | 東京大学 |
| 104 | 国家と市場の相互関係に おけるソフトロー | 東京大学 | 法学政治学研究科 総合法政専攻 | 岩村 正彦 | |
| 111 | 市場の高質化と市場イン フラの総合的設計 | 慶應義塾大学 | 経済学研究科 経済学専攻 | 吉野 直行 | 京都大学 |
| 113 | 制度構築の政治経済学 | 早稲田大学 | 経済学研究科 経済学専攻 | 田中 愛治 | |
| 114 | 成熟市民社会型企業法制 の創造 | 早稲田大学 | 法学研究科 民事法学専攻 | 上村 達男 | |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成20年度採択【分野名:学際、複合、新領域】

(中間評価結果) 現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される: 6件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|-------------------------|---------|---|
| J01 | 統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成 | 北海道大学 | 環境科学院 環境起学専攻 | 山中 康裕 | 独立行政法人国立環境研究所 |
| J03 | 環境激変への生態系適応に向けた教育研究 | 東北大学 | 生命科学研究科 生態システム生命科学専攻 | 中静 透 | |
| J04 | 次世代型生命・医療倫理の教育研究拠点創成 | 東京大学 | 医学系研究科 健康科学・看護学専攻 | 赤林 朗 | ヘイスティングス・センター(アメリカ)、国立衛生研究所(アメリカ)、ペンシルヴァニア大学(アメリカ)、ケース・ウェスタン・リザーブ大学(アメリカ)、オックスフォード大学(イギリス)、ベルゲン大学(ノルウェー)、モナシュ大学(オーストラリア)、シンガポール国立大学(シンガポール) |
| J05 | 学融合に基づく医療システムイノベーション | 東京大学 | 工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻 | 片岡 一則 | |
| J07 | 情報通信による医工融合イノベーション創生 | 横浜国立大学 | 工学研究院 知的構造の創生部門 | 河野 隆二 | 横浜市立大学、独立行政法人情報通信研究機構、オウル大学(フィンランド) |
| J10 | 新炭素資源学 | 九州大学 | 総合理工学府 物質理工学専攻 | 永島 英夫 | 福岡女子大学 |

(中間評価結果) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される: 4件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|---------------------------|---------|---|
| J06 | エネルギー学理の多角的学術融合 | 東京工業大学 | 理工学研究科 機械制御システム専攻 | 平井 秀一郎 | ジョージア工科大学(アメリカ)、韓国科学技術院(韓国)、シュツットガルト大学(ドイツ) |
| J08 | 地球温暖化時代のエネルギー科学拠点 | 京都大学 | エネルギー科学研究科 エネルギー基礎科学専攻 | 八尾 健 | |
| J11 | 社会に生きる心の創成 | 玉川大学 | 脳科学研究所 | 坂上 雅道 | カリフォルニア工科大学(アメリカ) |
| J12 | クロマグロ等の養殖科学の国際教育研究拠点 | 近畿大学 | 水産研究所 | 熊井 英水 | |

(中間評価結果) このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の適切な変更が必要と判断される: 2件

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|--------|---------------------|---------|------------------------------|
| J02 | 「アニマル・グローバル・ヘルス」開拓拠点 | 帯広畜産大学 | 畜産学研究科 畜産衛生学専攻 | 嘉糠 洋陸 | |
| J09 | 持続性社会構築に向けた菌類きのこ資源活用 | 鳥取大学 | 連合農学研究科 生物環境科学専攻 | 前川 二太郎 | モンゴル国立農業大学(モンゴル)、カセサート大学(タイ) |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

平成21年度採択【分野名:学際、複合、新領域】

| 拠点番号 | 拠点のプログラム名称 | 機関名 | 中核となる専攻等名 | 拠点リーダー名 | 連携先機関名(※) |
|------|----------------------|----------|-------------------------|---------|---|
| K01 | 境界研究の拠点形成 | 北海道大学 | スラブ研究センター | 岩下 明裕 | |
| K02 | ゲノム情報ビッグバンから読み解く生命圏 | 東京大学 | 新領域創成科学研究科 情報生命科学専攻 | 森下 真一 | 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構、独立行政法人理化学研究所、独立行政法人産業技術総合研究所、北京ゲノム研究所(中国) |
| K03 | 地球から地球たちへ | 東京工業大学 | 理工学研究科 地球惑星科学専攻 | 井田 茂 | 東京大学 |
| K04 | 地球学から基礎・臨床環境学への展開 | 名古屋大学 | 環境学研究科 地球環境科学専攻 | 安成 哲三 | |
| K05 | 極端気象と適応社会の生存科学 | 京都大学 | 防災研究所 | 寶 馨 | |
| K06 | 認知脳理解に基づく未来工学創成 | 大阪大学 | 基礎工学研究科 システム創成専攻 | 石黒 浩 | 株式会社国際電気通信基礎技術研究所、独立行政法人情報通信研究機構 |
| K07 | 自然共生社会を拓くアジア保全生態学 | 九州大学 | システム生命科学府 システム生命科学専攻 | 矢原 徹一 | 東京大学 |
| K08 | 再生医療本格化のための集学的教育研究拠点 | 東京女子医科大学 | 医学研究科 先端生命医科学系専攻 | 大和 雅之 | |
| K09 | アクティブ・ライフを創出するスポーツ科学 | 早稲田大学 | スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻 | 彼末 一之 | |

※他の大学等(大学を含めた国内外の研究機関)と連携した拠点形成計画

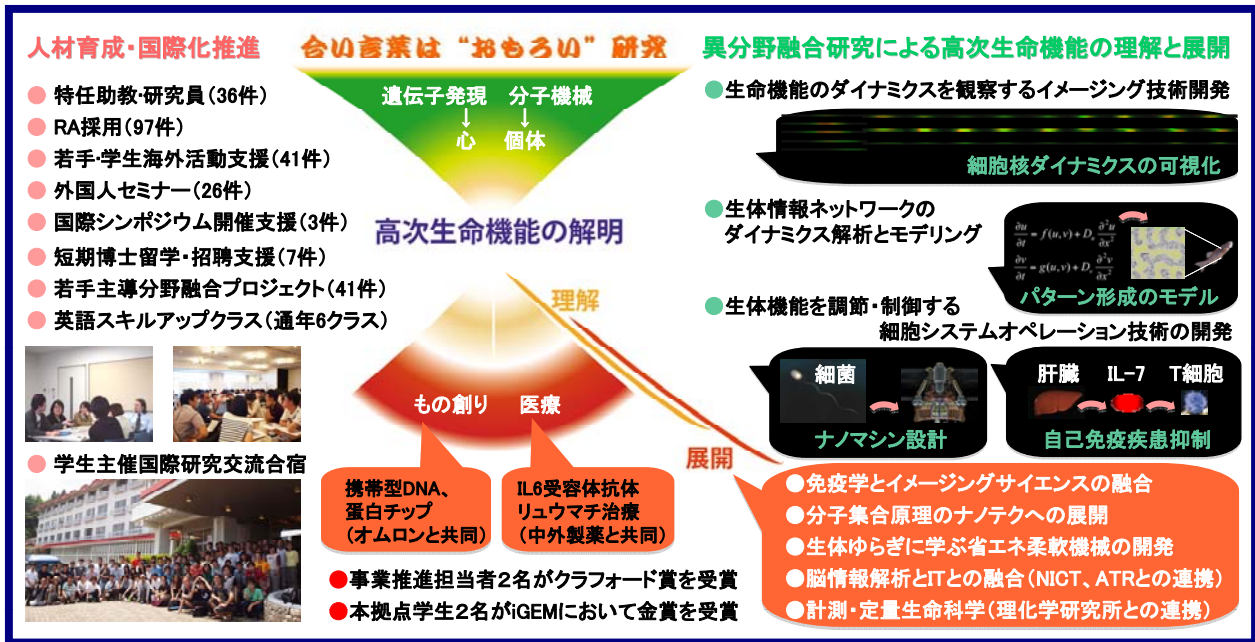
<参考2> 採択拠点における個別具体例について

平成19年度採択

【生命科学】

「高次生命機能システムのダイナミクス」大阪大学

本拠点では、高次機能イメージング・ナノ計測など先端的な技術開発を行い、分子・細胞レベルから、発生・免疫・脳科学に関わる個体レベルに至る幅広い対象を階層ごとに固有の論理を踏まえつつ**融合研究**を実施しており、理学、工学、医学を含む広範囲の分野を融合することにより、従来の生命科学の枠組みを越えた**分野横断**的な研究・教育を推進し、**生命システムの統括的理解**を目指しています。この研究環境のもと、自由な発想、多彩な手法と情報発信力を持つ**国際性豊かな人材育成**を推進しています。



【生命科学】

「個体恒常性を担う細胞運命の決定とその破綻」九州大学

本拠点では、「分子細胞生物学、発生学、免疫学などの基礎生命科学研究者」と「幹細胞医学を担う精鋭の臨床医学研究者」の密な連携のもと、最新の基礎生命科学の知見を医療などの分野に応用するための基盤をつくり、さらに臨床の現場の問題を基礎生命科学へフィードバックすることによって、新しい生命科学の流れを創造することを目指しています。このような連携プログラムにより、新たな生命科学を展開するだけでなく、「理学」と「医学」の両方の観点から**生命科学をリードする若手研究者の育成**を推進しています。

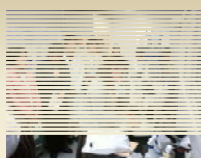
次世代育成

理医連携教育プログラム

- ・理医連携講義
理学系大学院生への医学系講義の開講および医学系大学院生への理学系講義開講と単位の認定
- ・若手研究者発表会
若手研究者、大学院生の英語による研究発表会
- ・先端技術講演会および技術取得コース
構造決定技術、プロテオミクス、バイオインフォマティクス、発生工学技術、幹細胞研究技術についての講演会の開催、および先端的研究の指導
- ・リトリート
合宿形式による研究発表/討論会
- ・理医連携特別プログラム
選抜された特別に優秀な大学院生(SRA:平成22年度現在4名)を対象とした理学博士と医学博士のダブルメジャー同等の認定証取得制度

若手研究者支援

- ・独立した若手研究者の採用
- ・研究環境整備拡充のための支援



先端技術講習会



リトリート



SRAの海外研修

部局を超えた研究活動の連携

ユニットの形成および連携

研究領域毎に「細胞増殖と死」、「細胞分化と機能発現」、「細胞移動と組織構築」、「幹細胞機能と自己再生」の4つのユニットを形成し、それぞれのユニット内、ユニット間、連携研究によって得られた**細胞運命決定機構の研究成果**を、とくに造血器や消化器を中心に**幹細胞医学へ応用**する。

研究サポートセンターの整備

ポストゲノム研究センター(構造生物学部門、プロテオミクス部門、発生工学部門、情報生物学部門の4部門)と**幹細胞研究センター**を設立。最先端機器を用いた技術提供を行うとともに各分野で得られた基礎的な成果を臨床応用に開発するため独自の高度技術開発を行っている。

海外研究機関とのネットワーク

世界トップクラスの海外研究拠点(ハーバード大、ロックフェラー大、ミュンヘン大、シンガポール国立大等9研究機関)との間で構築したネットワークを通じて、大学院生の海外研修と交流、情報交換、技術交換、共同研究を支援できる体制を形成している。

【化学、材料科学】

「新たな分子化学創発を目指す教育研究拠点」東京工業大学

本拠点は、次代の化学領域の研究・開発を担う若手研究者を育成するべく「合成」と「解析」という異なる要素を融合させる新しい発想の研究を牽引力とする教育を遂行することを目的としています。同じ化学系であっても、異なる側面を持つ教員や学生達が同じクラスター内で切磋琢磨することにより、新たな創発が生まれています。また、国際リーダーシップ教育の一環として、国際学会での発表や海外武者修行（長期の研究機関での共同研究等）を支援しており、昨年度は学生が自主的に国際シンポジウムを企画・運営をするなど、日々、成長しています。

クラスター組織における先端教育

異分野先端教育研究を行う。
コロキウム合宿で企業や大学を訪れ、その「最先端」を知る。

創発力を持った
次世代リーダー
の育成

学生が行なう国際交流

国際学生交流ワークショップ（台湾国立清華大学と本学とで交互に開催）における運営・各種発表を行う。
国際シンポジウムにおける企画・運営・各種発表を行う。

若手研究者への支援

リサーチアシスタント(RA)として毎年70名程度の学生を雇用し、研究活動を支援したり、研究成果が顕著な学生には研究費も支給する。海外出張支援システムは毎年15名程度が利用し、国際学会での積極的な発表経験を支援している。海外武者修行として多数の学生が、海外で長期に渡って研究を行なっている。国内外の著名研究者を招聘する先端研究者特別講義は、100回以上の開催を数え、毎回多数の学生に刺激を与えている。

G-COE基盤教育

- ・測定化学（機能解析に関する最先端の高度計測知識の習得）
- ・化学産業ものづくり特論（化学系企業で中堅として活躍する方を講師として招き、企業における研究開発等の実情を探る）
- ・科学ライティング（専門家による論文作成の添削指導）
- ・化学環境安全教育（科学者としての基本の定着）
- ・外国人特任教員との英語によるディスカッション（コミュニケーション力を磨くとともに専門分野研究を深める）



7th Workshop on Organic Chemistry for Junior Chemists (台湾)



The 4th International GCOE-Chem6 Symposium for Emergence of New Molecular Chemistry (RA学生が企画・運営の全般を担当)

【化学、材料科学】

「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」名古屋大学

本拠点では、現代社会の発展を支える機能性物質の創製と、生体機能の化学的視点による理解を中心的命題とした研究展開により、分子性物質科学の新潮流を創り出すとともに、それら最先端研究を通じて若い国際的リーダーの育成に取り組んでいます。本拠点が全面支援する留学生教育、年間50件を越えるシンポジウム・セミナーの開催、自立した研究者に必要な研究提案力・研究遂行力・発表力を高める実地教育、英語によるコミュニケーション力を高める英語研修や海外派遣など、多彩な若手育成事業を強力に推進しています。

基礎科学力強化に不可欠のグローバルCOE

研究の4本柱

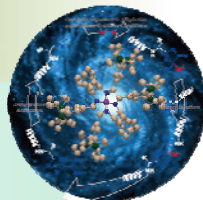
914 件の論文発表、93 点の著作、
83 件の特許（H19年度～21年度）



化学の視点を貫く

生命科学

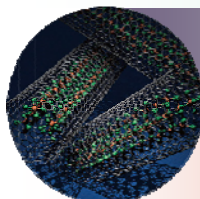
鈴木カップリングを触媒する酵素
タンパク質輸送のメカニズム
金属酵素の活性部位モデル構築



精密を究める

合成化学

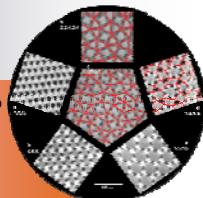
キラル相関移動触媒
ユビキチンCH結合の直接変換
金属を使わないヨウ素触媒



新規物質の創造と機能設計をめざす

ナノ分子科学

金属ワイヤー内包カーボンナノチューブ
分子クラスター電池



究極の物性・機能を創出する

高分子科学

人工二重らせん
ABCスターポリマーの二次元秩序構造制御

多彩な若手育成事業

【若手海外派遣・招聘】

博士課程学生の中長期海外派遣
海外学生の短中期滞在への支援

| | |
|------------|-----|
| 派遣 | 27名 |
| 受入 | 37名 |
| H19年度～22年度 | |



【若手研究会】

若手主宰の分野融合型研究会。
年1回開催。

【若手自立的研究】

D2年時のリサーチプロポーザル
38件採択、
4年間での研究費3040万円

【博士学生の経済支援】

RA採用189名(H19年度～22年度)

【博士研究員の雇用】

69名(H19年度～22年度)

【シンポジウム・セミナー】

146回開催(H19年度～21年度)

【英語語学研修】

受講者数197名
(H19年度～22年度)

【外国人留学生への支援】

留学生数延べ23名(H20年度～22年度)



【博士キャリアパスセミナー】

3回開催(H20年度より年1回開催)

【情報、電気、電子】

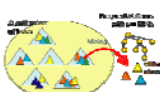
「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」 北海道大学

本拠点では、来るべき**知識社会の基盤技術**となる「**知識創出学**」をキーワードに、世界トップレベルの研究実績をもつメンバーが**一丸**となって、**実世界と情報世界における次世代情報科学の国際的教育研究拠点の確立**を目指しています。このために、**ハードウェアから、ソフトウェア、実世界への応用**に及び「**異分野共同研究プロジェクト**」を先端的研究と若手育成の中心に位置づけ、**専門分野を深く極めると同時に、幅広い視野をもち、国際的に活躍できる若手研究者の育成**を行います。

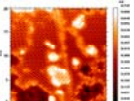
異分野共同研究プロジェクトによる若手研究者育成

● **さまざまな分野の専門家が関わる共同プロジェクトへの参加を通じて、一つの分野を極め、複数の分野で活躍できる若手を育成**

■ ナノ科学と情報：大規模実世界データに挑戦する知識発見



- ミクロな原子の世界を探索する微細構造計測・構築技術（ナノ）
- 大量データからのデータマイニングと隠れた特徴を発見するパターン認識（情報）



■ ハードウェアとソフトウェア：超高速データ処理を実現するFPGA超高速情報探索プロジェクト

- ソフトウェア（アルゴリズム）とハードウェア（VLSI設計・信号処理）の結合による超高速情報探索ハードウェア
- E-learningによる遠隔ハードウェア開発教育
- ソフトウェア分野の学生が実際にハードウェア開発を経験



■ バイオと情報：未知の生物を探る多様性と新種探索プロジェクト



- 学生の開発技術を、2000mの深海を探索する知的遠隔操作海中ロボット（ROV）に搭載
- 大規模新種発見とデータベース構築のための知的データ処理技術に参加
- 最先端のロボティクスと画像処理の応用

若手人材育成・国際化支援

- 80名超のDC学生をGCOE RAとして雇用（H22）
- **異分野共同研究**を通じた人材育成
- **双峰型教育**（主分野と複数の副分野）
- 公募型**若手研究支援制度**
- **国際会議・海外拠点派遣制度**による「海外武者修行」
- 若手支援のための**産学協同セミナー**
- **GCOE国際シンポジウム**でのポスター発表
- **英語トレーニング**・サポート
- 海外研究者・拠点との**交流・連携**
- 講演会・公開講座

海外派遣のための英語トレーニングコース



GCOE国際シンポジウム

E-learningと異分野共同プロジェクト

【情報、電気、電子】

「フォトニクス集積コアエレクトロニクス」 東京工業大学

本拠点の研究分野は、フォトニクスをコアに集積エレクトロニクスを融合する学術分野であり、**フォトニクスとエレクトロニクスの集積・融合**により、将来の情報通信技術をはじめとして新たな価値の創出が期待されます。高度な研究能力に加え、問題発見・解決力を備える研究者・技術者の育成を推進し、**技術マネージメント力、企画運営力、対人力**に加え、**国際性**を備えさせることで、科学技術の基礎から産業界までをも見通すことのできる人材「**総合力のある東工大人**」を持続的に輩出することを目標としています。

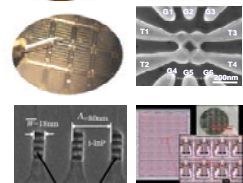
多様な博士課程教育プログラムの推進

- 国際性強化、幅広い高度な基礎学力、リーダーシップ力強化
- 海外特別実習制度（3～6ヶ月）
- 海外短期研修
- 特別コロキウム（異分野融合、英語プレゼン）
- 語学強化プログラム
- サマースクール（国際版、国内版）
- 海外連携拠点講義シリーズ
- グローバルセミナー
- メンター制度
- コ・アドバイザー制度
- 学外審査員制度
- 博士フォーラム（博士学生の自主組織による運営）
- 博士研究員(RA)制度

博士課程教育プログラムの実績

- 博士研究員(RA)制度
 - H21年度(72名)、H20年度(73名)、H19年度(59名)
- 海外特別実習制度(3～6ヶ月海外大学・研究機関への派遣)
 - H21年度(10名)、H20年度(14名)、H19年度(8名)
- 特別コロキウム(英語によるプレゼンテーション)
 - H21年度(69名)、H20年度(50名)、H19年度(22名)
- サマースクール(海外拠点との連携実施、5日間の集中講義)
 - H21年度(40名)、H20年度(46名)
- メンター制度
 - H21年度(162名)、H20年度(161名)、H19年度(87名)

フォトニクスと集積エレクトロニクスの融合 デバイスから応用システムまで



フォトニクス・ナノエレクトロニクスのイノベーション

海外拠点との連携・国際ネットワーク構築

カリフォルニア大学バークレイ校、ケンブリッジ大との機関連携を中心として、国際連携を推進



- 国際サマースクール(iNOW 2008)、2週間開催、国内外250名参加
- 大規模な国際研究会として定着
- 通常の国際会議では得られない国際ネットワーク構築

【人文科学】

「心の社会性に関する教育研究拠点」 北海道大学

「心の社会性」とは、ヒトの心を、集団という社会生態学的環境において繰り返し現れる問題群（“適応問題”）を解くために特化した道具を束ねた適応システムとみなす観点です。この観点に基づき、本拠点は、進化ゲーム理論に基づくモデル構築、行動・生理・脳機能計測実験、調査・フィールドワークによる**最先端の研究を実施**すると同時に、**海外主要研究拠点との共同研究教育体制**を整備し、また経済学・政治学などの他の**社会科学領域と連携した教育プログラム**を推進することにより、**世界水準の若手研究者の育成**を行っています。

若手研究者の育成

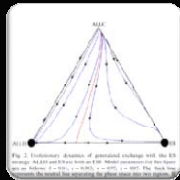
- ✓ 大学院生への国際学会旅費支援（のべ50名以上、総額約800万円）
- ✓ 英語論文執筆支援（以下に示す国際学術論文数などの成果が得られている）
- ✓ 若手研究者雇用（ポストドク研究員：のべ8名、RA：のべ41名。うち外国人ポストドク3名）
- ✓ 競争的研究資金の配分（国際水準の研究に対する集中的支援）

若手研究者の育成実績

- ✓ 若手研究者による国際誌論文数、国際的発信力の増加（2007年-2010年11月）
若手研究者の国際学会誌掲載論文数：**65**（うち**50**が若手研究者を第1著者とする論文）
若手研究者を著者を含む論文への被引用件数は、GCOE以前の5年間に比べ、GCOE開始後（現在まで4年間で）**253→388**に大幅増加
- ✓ 5つの国際賞を含む、**40**以上の学会賞・フェローシップの獲得

学会賞の一例：Neuropsychoeconomics Conference (2007), International Conference on Psychology and Law (2007), International Congress of the International Association for Cross-cultural Psychology (2007), Annual Cognitive Neuroscience Meeting (2008), International Congress of Psychology (2008)

数理解析



行動実験



「心の社会性」の解明



生理機能計測



フィールドワーク

拠点形成の目的

人の心と社会の相互影響過程を、数理解析・シミュレーションによる理論モデルの構築と、行動実験・フィールドワーク・生理機能計測によるモデルの経験的検証を通して解明する。

海外研究機関との連携

- ✓ UCSB進化心理学センター、UCLA行動進化文化センター、インディアナ大学認知科学プログラムとの共同教育研究体制
UCSB進化心理学センター長2名が当GCOE拠点形成に参加
共同研究・合同シンポジウムの開催
若手研究者の相互派遣
- ✓ インターナショナル・レクチャーシリーズ
- ✓ 外国人ポストドクの積極的雇用
英語による日常的な議論を通して、若手研究者による研究成果の国際発信力の獲得を促進

社会科学領域との連携

- ✓ 文部科学省特定領域研究「実験社会科学—実験が切り開く21世紀の社会科学—」との共同教育研究体制
- ✓ 実験社会科学サマースクール・コンファレンスの共同開催
経済学・政治学など異なる領域の研究者が、「実験」を共通言語として協働する場を提供
分野の壁を超えて活躍できる国際水準の若手研究者の育成を支援

【人文科学】

「演劇・映像の国際的教育研究拠点」 早稲田大学

本拠点では、演劇学と映像学を融合した、諸分野を横断する応用的な比較研究を通じて、新しい演劇映像学研究者を育成し、世界をリードしつつあります。**この拠点には国内外から公募・選抜された、演劇・映像研究を志す博士後期課程学生やポストドクが、国籍・学籍の隔てなく、160名以上参集**しています。また、本拠点は、研究生に無償で本学大学院生と同等の研究環境を与え、国際的な調査研究活動への参加や国際学会での発表機会の提供、特に優れた学位論文の出版、RAとしての雇用などあらゆる支援を行っています。

若手研究者の育成

グローバルCOE研究生制度

若手研究者を**国籍・学籍**を問わず受け入れ**世界の演劇・映像研究をリード**する人材を育成

海外

30名

研究生
162名

早稲田
61名

他大学
71名

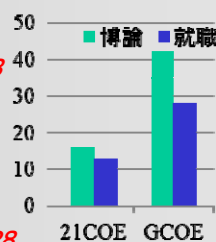
若手研究者への支援と実績

支援（2010年12月現在）

- ・若手研究者雇用 **44**
- ・海外研究発表支援 **38**
- ・研究会・講演会・シンポジウム開催件数 **450**

実績（2010年12月現在）

- ・博士論文提出件数 **42**
- ・専任研究職への就職 **28**



演劇学

映像学

Theatre Studies Film Studies

共通の研究課題・方法論

演劇と映像研究者の協力による「最古の文楽映像」の国際的発見

成果



国際的な研究活動と成果の還元

海外での国際シンポジウムの開催

「演劇・舞踊・芸術環境 一日仏交流の20世紀」



提携機関のパリ第10大学、フランス国立科学研究所との共催事業。パリで開催し発表は仏語。仏演劇雑誌で当企画の特集号が刊行される。

研究成果を演劇・映像界、社会へ還元

国際研究集会

「60年代演劇再考」
アングラ演劇を検証する本邦初の試み。演劇界から大きな反響を得る。



フォーラム「舞台芸術環境の未来を考える」
文化政策の観点から「劇場法（仮称）」に関して議論。



【学際、複合、新領域】

「化学物質の環境科学教育研究拠点」 愛媛大学

本拠点は、「若手研究者育成プログラム」、「生物環境試料バンク」、「アジア環境研究者ネットワーク」などの教育研究基盤を充実させて活用し、化学汚染に関わる環境科学の世界的拠点形成を目標としています。教育面では国際的に活躍できる若手研究者の養成を、研究面では化学汚染の時空間分布、動態解析、リスク評価などの課題を軸に環境化学の学際化を推進し、優秀な若手が国内外から集い熟達した専門家として巣立つ先導的な拠点の形成を進めています。また、本拠点は、平成21年度中間評価において「特に優れている拠点」に選定されました。

学際性豊かで国際的に活躍できる若手研究者を養成して 環境化学の先導的な教育研究拠点を形成

学際的人材育成

- 学際研究者育成プログラム 異分野に挑戦する知的好奇心の涵養 学際教育・セミナー 野外実習・出張への参加
- 独自の研究者育成プログラム 研究者として必須の基礎的技量習得 独自の研究機関に研究員委嘱

グローバルに活躍できる若手研究者の養成

- 環境理念を語り実質化できる人材
- 国際社会や地域社会に貢献できる人材
- 組織のリーダーになれる人材

先導的研究拠点の形成

化学汚染と生体影響に関わる国際協力の研究成果を創生

- 汚染の時空間分布 (実態解明・過去の復元・将来予測)
- 循環と生物濃縮過程の解析 (動態解析とモデリング)
- 分子レベルの生物影響とメカニズムの解明 (生体毒性の解明とリスク評価)

教育研究基盤

- 海外学術交流研究機関ネットワーク
- アジア環境研究者ネットワーク (es-BANK)
- 生物環境試料バンク

教育活動等の実績 (平成22年9月末現在)

- G-COE教育研究拠点発足記念フォーラム開催 (小泉昌俊東大特別栄誉教授講演)
- 国際シンポジウム、国際フォーラム1件の開催、英文プロシーディングス4冊を刊行
- 特別セミナー4回 (若手主催15回)、レクチャーシリーズ5回、ワークショップ4回の開催
- 英語トレーニングコース142回、論文授業教室43回の開催
- 海外研修留学制度による派遣5名、招聘5名
- 国内の野外実習・調査に133名、海外調査に18名が参加、国際学会で100名が発表
- 研究課題を公募・審査して48課題に研究費を支援
- DC/PhDの9名が大学教員、5名が国公立研究機関の専任研究員、18名が大学・公設研究機関のPhD研究員、3名が民間企業の研究員として就職
- 著書58冊、原著論文300編、総説23編、報告書等38編、国際学会等105編、国内学会63編、合計1,496編 (内英文発表 790編)の研究成果を発表 (平成19~21年度)
- 国際賞5件、学会賞14件を受賞 (内若手受賞 7件)
- es-BANK試料を活用した共同研究推進 (平成19~21年度556編の論文・学会発表、途上国バンクを課題とした国際シンポジウム)
- COE研究補助員 (DC) 39名、PhD研究員 30名、COE教員 12名を雇用
- ホームページの開設、ニュースレター (英文+和文)、G-COE概要、中間成果報告書の発行
- 国際賞5件、学会賞14件を受賞 (内若手受賞 7件)

国際研究者育成プログラム 世界を目指す 国際賞の獲得 海外研修留学制度 国際学会での発表 英文授業実施

先導的研究者育成プログラム リーダーとしての高い研究能力を有する 途上国研究者の育成

留学生教育の高度化プログラム アジア圏留学特別コースの創設による高度化教育

国際シンポジウム 世界を目指す 国際賞の獲得 海外研修留学制度 国際学会での発表 英文授業実施

先導的研究者育成プログラム リーダーとしての高い研究能力を有する 途上国研究者の育成

留学生教育の高度化プログラム アジア圏留学特別コースの創設による高度化教育

International Symposium on es-BANK 小泉東大特別栄誉教授によるご講演 特別セミナーの開催 環境汚染・人体暴露調査(ベトナム) 野外実習(イルカの解剖)

【学際、複合、新領域】

「放射線健康リスク制御国際戦略拠点」 長崎大学

本拠点は、放射線が人に与える健康リスクを地球規模で究明し、放射線の負の遺産を克服する方策をうち立て、人類の安全と安心に寄与する為の科学的基盤を確立し、統合的な国際戦略研究の推進と、放射線医療科学分野の人材育成を活動目的としています。本目的を達成するために、原爆医療と国際放射線保健医療の教育研究実績を基に、旧ソ連フィールド拠点ならびに欧米先端研究拠点と連携して、放射性発がんに関する分子疫学調査、放射線基礎生命科学研究を推進し、放射線健康リスク評価から管理に携わる人材を育成しています。

WHO共同

遺伝子解析 細胞機能解析 病理解析 SNPs

放射線基礎生命科学研究 海外拠点と連携した分子疫学調査 国際放射線保健医療研究 原爆医療研究 社会科学的研究

生涯発がんリスク解明研究 多重がん、精神心理的影響

大学院教育の充実とリスク学・原爆医療学・放射線生物学・フィールド調査研究の展開支援

低線量影響調査

「被ばく医療学」の確立を通じた放射線健康リスク評価・管理の科学的基盤の構築、人材育成と社会貢献

チェルノブイリ コロスゲン ゴメリ ミンスク

旧ソ連放射能汚染地域療養医療活動 (Cs137)

低汚染地域 中汚染地域 高汚染地域 30kmゾーン 国境

【医学系】

「歯と骨の分子疾患科学の国際教育研究拠点」 東京医科歯科大学

本拠点は、世界一の高齢化が進行する我が国で、“歯と骨”の疾患の分子病態とその再建・治療について、新領域の研究者を加え最先端の研究をさらに推進し、国際教育推進体制を整備し、「世界で活躍する若手研究者」を育成する事を目指しています。“歯と骨”は、加齢により量・質共に喪失が進行し、これを止めることは尚困難なため、国民の健康上、その再建・治療を行うことは喫緊の課題であることから、本拠点では、この領域の基礎と臨床の教育研究拠点の形成を行います。

国際的に活躍する若手育成

シンポジウム開催

海外でのResearch Day

海外トップ研究者による個別メンタリング

海外での大学院生によるレクチャー

総合プレゼンテーション

歯と骨の世界のトップの研究

う蝕制御

骨免疫学

新レジン開発

ナノゲル

骨形成解析

【医学系】

「幹細胞医学のための教育研究拠点」 慶應義塾大学

初期胚から個体の死に至る一生を通じ、幹細胞は、基本的にすべての臓器に存在し、さまざまな疾患の病態や治療と密接に関連しています。本拠点は、iPS細胞の開発など、世界で注目されるわが国の幹細胞医学研究を進展させ、医学全体を俯瞰した「幹細胞医学」と呼ぶべき学問領域の創生を目指しています。そして、幹細胞医学を軸とした**教育研究の重点化**と**自立性にあふれた次世代の担い手である若手研究者の育成**を行っています。

COEX MEETING

若手研究者による英語プレゼンテーション 月例研究発表会
2003年21世紀COE開始時より継続(8年目)
世界標準のプレゼンテーション技術を磨く

人材育成 3つの特徴

若手人材の成長ステージに応じた体系的な教育プログラム
大学院生(RA) ⇒ PD ⇒ 若手フェロカルティ ⇒ PI

“自己複製能”の獲得
継続的な教育研究体制の構築と人材育成の好環境の形成
大学院生の上級生がRA(リサーチアシスタント)として下級生を育てる、人材育成の好循環を形成します。

“多分化能”の獲得
国際的指導力のある多彩な人材の育成
RAは「幹細胞レクチャーコース」を必修受講し幹細胞の最先端知識を幅広く習得します。

“遊走能”の獲得
国際的な共同体制構築のための人材交流
海外連携機関訪問・共同研究の遂行・海外留学等若手の武者修行を支援します。

<http://www.gcoe-stemcell.keio.ac.jp/>

基礎から臨床の実現に向け
5つの領域・サブグループを構築

- 1 組織幹細胞制御とIn Vivo実験医学
- 2 炎症・免疫制御と組織再生
- 3 癌幹細胞とEMTを標的とした新規癌治療の開発
- 4 難治性疾患の再生医療の開発
- 5 実現可能な再生医療の実践

GCOE国際シンポジウム2010
ポスタープレゼンテーション

本拠点で2009・2010年 連続開催している「プレゼンテーションスキル向上のためのワークショップ」で習得したプレゼン技術は実践で生きている

主な研究成果・進捗状況

トランスジェニックマウス・マーモセット個体の作成に成功 *Nature* 459 (2009)
生殖幹細胞・体細胞相互作用とRNAサイレンシング *Nature* 461 (2009)
ES細胞から誘導した心筋精製のための新しい方法を確立 *Nature Methods* 7 (2009)
末梢血中の終末分化したヒトT細胞からiPS細胞の樹立に成功 *Cell Stem Cell* 7 (2010)
腹腔内脂肪組織に新たなリンパ球の集積(FALC)とそこに集積するナチュラルヘルパー細胞を発見 *Nature* 463 (2010)
血液のもとになる細胞を増殖、治療によって失われた血球を回復させるカギとなるタンパク質を発見 *Blood Aug* (2010)
眼科領域初、ヒト幹細胞を用いる臨床研究指針の承認を得る (2009)
本拠点管理の慶應ベクタープロセッシングセンター(KVPC)を用いて調整した幹細胞を含む上皮シート移植手術を実施。
(2009・2010) 角膜再生医療の臨床研究が始まる。経過良好。

幹細胞医学研究を牽引する拠点リーダー 岡野栄之

プレスリリース 記者会見でインタビューに応える本拠点RA(大学院生)

【数学、物理学、地球科学】

「変動地球惑星学の統合教育研究拠点」 東北大学

本拠点では、世界の多くの教育研究拠点と重層的な研究教育ネットワークを形成し、研究者や学生の相互交流と共同研究を強力に推進しています。研究面では、地球と惑星を統合的にとらえ、地球惑星変動と地球環境変動を解明する、**変動地球惑星学**の創出を国際交流と国際共同研究のもとに推進しています。教育面では、課題発掘力、技術開発力、フィールド力、国際発信力の育成をさらに推進するとともに、本拠点の研究分野の幅広さを生かして**統合力**を育成し、世界に貢献する幅広い力をもった優秀な人材を育成しています。

AWARD 拠点の国際的評価と主な受賞

- ✓ **世界トップレベルの地震学研究!**
= 過去10年間の全世界地震学者30,670人のトップ10にメンバー3名が選出 =
- ✓ 紫綬褒章2件、文部科学大臣若手科学者賞2件、国際学術賞1件、アメリカ地球物理学連合フェロー1件
- ✓ 国際会議での基調講演・招待講演58件、学会賞9件
- ✓ 学生の学会発表賞・ポスター賞17件 (内国際会議8件)

世界の研究拠点とネットワーク構築

- ✓ 米国・フランス・ロシア・台湾の研究拠点を結ぶネットワークを構築
- ✓ 米国・オーストラリアの研究拠点を結ぶ環太平洋ネットワークを構築
- ✓ アジアにおける衛星観測による**沿岸海洋研究ネットワークの中心**を担う

AWARD 学生・若手研究者の活躍と研究成果

- ✓ 謎の領域、トンガスラブの地震波速度異方性の原因を解明! (博士課程 D2, Nature, 2008)
- ✓ 初期地球の隕石と海洋との衝突現象に注目、世界で初めて隕石海洋衝突環境を模擬実験およびアミノ酸生成に成功! (博士課程 D3, Nature Geoscience, 2009)
- ✓ 地球生命史上最大の謎を探る基礎資料となる「生物大絶滅当時の地層」を発見! (博士課程 D1, Palaeogeography他, 2009)
- ✓ 月周回衛星「かぐや」にレーダサウンダを搭載し、世界で初めて月の全球地下構造を探索! 月火山活動の変遷や月冷却時期を調査。(Science, 2009)
- ✓ 広域観測と南極「ドームふじ」の氷床コアに対する分析により、温室効果気体の変動と循環の解明! (Nature Geoscience, 2009)

若手研究者の育成プログラム

- ✓ **最先端の海外研究者による英語セミナー開催**
最先端の知識を吸収させ、学生の知的好奇心を刺激し、新しい学問を切り開く
- ✓ **専攻・研究科横断型の共通教育プログラム実施**
異分野の実践的技術を幅広く身につけることによって、新しい学問を生み出す力を養う
- ✓ **国際学会参加支援**
英語で議論する力を育成
- ✓ **国際インターンシップ**
アジア地域、環太平洋地域、ヨーロッパ地域の教育研究機関との国際連携教育
- ✓ **海外派遣、国際会議企画奨励**
積極的な国際交流研究活動に財政支援

【数学、物理学、地球科学】

「未来を拓く物理科学結集教育研究拠点」 東京大学

本拠点では、東京大学が持つ物理学の卓越した知と技を結集し、未解明の問題に挑むとともに、大学院生の「発想の次元の拡大」を促し、「**基礎科学の礎としての物理学の深化と展開を担う人材**」、「**グローバル社会を先導する物理人材**」、および「**産業の変革と創造を担う物理人材**」の育成を目指します。これらの高度な研究教育の実施と物理知の拡大により、人類社会の課題解決に貢献することを長期的な目標としています。

物理学に関する3つの研究科と5つの専攻が結集・協力

1. 物理学の深化と展開を担う人材の育成
 - ・融合先端物理プログラムによる理工連携の推進
 - ・博士学生企画による集中セミナー(RAキャンブ)の実施
 - ・分野横断型萌芽的研究室(グローバルCOEラボ)の開設
2. グローバル社会を先導する人材の育成
 - ・海外研究活動支援制度(長期海外派遣)の推進
 - ・アジア圏ハブ人材育成拠点の形成
 - ・韓国延世大、シンガポール南洋理工大、中国清華大と協力
 - ・国際研究拠点形成とグローバル化の推進
 - ・大学別論文数・被引用数では物理分野世界トップ
3. 産業の変革と創造を担う人材の育成
 - ・キャリアパスの開拓
 - ・集中講義の開催、工学キャリア支援オフィスの開設支援
 - ・研究室単位で企業と共同研究を実施

【機械、土木、建築、その他工学】

「機械システム・イノベーション国際拠点」東京大学

環境に配慮しつつ活力ある持続的社會を実現するため、「**拡張ナノ**」を活用した革新的な機械システムを創出し、新たな「**拡張機械工学**」体系を構築すると共に、国際性を有し、将来の産業界・学術界においてリーダーシップを取って活躍できる人材の養成を行います。「**拡張ナノ空間研究**」「**ナノ・マイクロ要素イノベーション**」「**シンセシス・イノベーション**」の世界最先端の研究プロジェクトのもと、**■基礎素養 ■専門知識 ■リテラシー ■コンピテンシー**を兼ね備えた逞しくタフな若者を育成します。

■ 拡張ナノ空間研究

ナノの制御によりこの空間に誘起される現象を活用することで、これまでにない効果を発現する革新的な機械の創出を目指す。

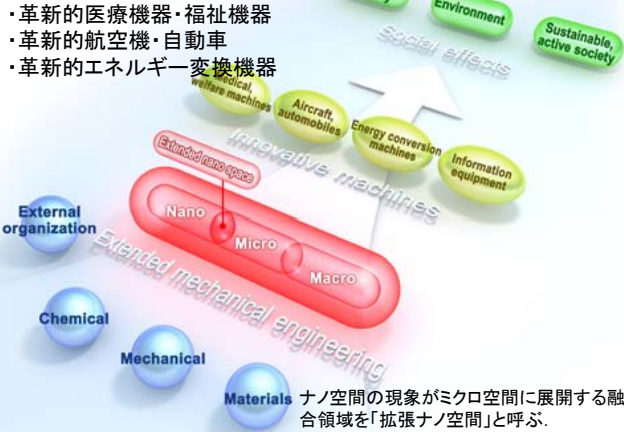
■ ナノ・マイクロ要素イノベーション

拡張ナノ空間研究で確立される理論に裏付けされて、実世界に革新的機械を創出するための要素を創る。

■ シンセシス・イノベーション

革新的機械を創出するためのシンセシス技術を確立する。

- ・革新的医療機器・福祉機器
- ・革新的航空機・自動車
- ・革新的エネルギー変換機器



ナノ空間の現象がマイクロ空間に展開する融合領域を「拡張ナノ空間」と呼ぶ。



■ 基礎素養

(数学, 物理, 化学, 生物等の自然科学, 人文社会科学の基礎)

■ 専門知識

(工学の専門知識, 技術・社会・環境に関する俯瞰的知識)

■ リテラシー (コミュニケーション, 情報, 倫理)

■ コンピテンシー (リーダーシップ, 課題設定力・解決力, 遂行力, 責任感と使命感)

【機械、土木、建築、その他工学】

「マイクロ・ナノメカトロニクス教育研究拠点」名古屋大学

マイクロ・ナノメカトロニクスを基盤とする新世代学際分野の構築を通して、**未踏分野に果敢に挑戦する若手研究者を育成**し、先端技術獲得のみならず社会的課題をも視野に入れた**独創性に重点を置く世界最高水準マイクロ・ナノメカトロニクス研究**及び**次世代医療のブレイクスルー創出**を目指しています。本学のマイクロ・ナノシステム工学専攻を軸として、UCLAとの連携や、先端材料、機械科学、計測・システム工学、バイオ・先端医療分野のトップ研究者を結集した国際的教育研究環境を活用し、**国際レベルの学際研究リーダーを育成**します。

21世紀の中核技術、マイクロ・ナノ技術の確立を目指す世界的視野に立った**勇氣ある知識人**の育成

多彩な研究者育成プログラム

★「**スーパードクター制度**」の設立
大学院博士課程前期・後期課程を一貫教育経済的な支援、積極的な海外派遣

★**経験重視実践プログラム**
学生・若手研究者が自ら企画する実践的な国際ワークショップ・研究成果発表会の開催
H20~21年度4回開催、参加学生170名(外国人35名)

★**産学・医工連携の新カリキュラム**
産業界からの講師招聘による多彩な授業医工連携等の学際的分野の授業創設

★**GCOEセミナー**
世界トップレベル研究者によるセミナー最先端研究に触れる機会を提供
55回開催(内48回外国人講師)
延べ1500名参加
(H20~21年度)

★**UCLAとの連携**
長期滞在研究 Dr. 2名
学生企画ラボツアー、ワークショップを毎年開催



次世代リーダー輩出

- 学界・産業界への人材輩出による社会貢献
- キャリアパス実績
大学教員 8名
公的研究機関 5名
民間企業(研究開発) 8名
PD4名 等

世界への情報発信

- ◎研究成果の発表
学会発表322件、論文発表234件(H21年度実績)
- ◎GCOEホームページ及びNagoya University Researchを通した情報発信
- ◎「Nature」にGCOE特集冊子を出版(Vol.461(7265), 2009/10/8)

Nagoya University Research
The best is here



国際的研究ハブ拠点形成

◆国際的拠点ネットワークの展開

国際連携機関:

- UCLA, フライブルグ大学、ニューキャッスル大学、ソウル大学、釜山大学、清華大学、上海交通大学、聖アンナ大学院大学、早稲田大学、筑波大学、韓国科学技術研究院

◆**国際会議主催**(H20~21年度実績)
国際会議主催: 8回、参加海外研究者: 計211名

◆**マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター設立**
マイクロ・ナノメカトロニクスの先進的実用的な研究推進
(H21年10月設立)



世界に誇る研究成果



ナノニードル操作による細胞の機械特性測定, 2010 IEEE Robotics and Automation Technical Field Award受賞 **【日本人2人目】**

歯髄幹細胞によって神経組織を再生することに成功
日本再生医学会 **【世界初】**

【社会科学】

「社会科学の高度統計・実証分析拠点構築」一橋大学

社会科学における実証研究は、自然科学における実験に比すことが可能であり、このような実証研究にとって重要なのは、長期間をカバーする統計と個票データの整備です。本拠点では、継承する2つの21世紀COEプログラムで蓄積した教育・研究基盤を活用し、世界の研究者コミュニティに開かれた**データ・アーカイブ**を核とし、OJTによる**国際的水準の統計・実証分析専門家の養成**と、実証研究やデータに直結した**統計分析手法・経済理論の開発**を行う、世界的な教育研究拠点の構築を目指しています。



日本を代表する統計データ・アーカイブ

- 日本最初の政府統計マイクロデータ・センター
- アジア長期経済統計シリーズの作成(フロンテック大学、LSE、ハーバード大学等とのネットワーク)
- JIPデータベース(OECD、FRB、内閣府等でも活用される日本の産業構造と生産性を分析する基礎資料、平成20年度-22年度10月1日までに約8万6千回のアクセス実績)
- 農家経済調査個票のデータベース化と公開
- アジア・サーベイ調査コンソーシアムの構築

世界の研究者コミュニティに開かれた拠点として、平成22年10月1日までに海外機関の院生や研究者が46名、国内他機関の院生や研究者が60名共同研究に参加。また、30回の国際コンファレンスを開催。

人材育成:実証分析のオン・ザ・ジョブ教育拠点 拠点内での人材育成

- 高度統計・実証分析カリキュラム
- 大学院生への経済的支援とOJTの結合:COEフェロー、RA、TAの公募採用
- 特任教員による統計・実証分析教育、研究成果発信のための高度な英語教育

世界に開かれた教育拠点

- 国内外のポスドクをCOE研究員として公募採用
- 国内外の他機関に所属する大学院生・若手研究者を「COE研究生」として受け入れ、OJTの機会を提供
- 国内外の大学院生を募集し、合宿形式で鍛える若手集中セミナー
- 第一線の研究者によるレクチャーシリーズ

【社会科学】

「人間行動と社会経済のダイナミクス」大阪大学

伝統的な経済学は、人間の「合理性」を前提として構築されてきました。しかし、不況や多重債務といった問題は「合理性」のもとでは発生しません。そこで、本拠点では、**経済実験・アンケート**といった新しい研究方法と脳科学などの関連分野の手法を経済学の分析手法に加えた**行動経済学的分析**により、人間行動を実証的に把握し、判断におけるクセ、あるいは非合理性のパターンを明らかにし、社会経済のダイナミクスを探ることを目指しており、**日本における行動経済学の拠点**として、多数の若手研究者を育成しています。

若手人材育成の目標

新しい経済問題を高度な分析技術を基礎に、新しい発想・手法を用いて研究し、解決策を提案し、研究成果を国際的に発表していく能力をもった人材の育成

1. 経済学の最先端で用いられる標準的な技術(コアコース・TA)
2. 新しく発生する社会経済の諸問題を分析できる能力
3. 経済実験やアンケート調査の実施能力
4. 英語で研究論文を執筆し、国際学会で発表できる能力
5. 国際的な研究者ネットワークを作る能力
6. 関連学問領域に関する知識

若手人材育成の状況

・博士後期課程学生の育成:GCOEの当初2年間で査読付き雑誌43件、学会報告55回→研究者として9名就職(うち任期無し国立大学准教授・専任講師2名)

・英文アカデミックライティング(米国人教員)、神経経済学、実験経済学、データ分析に関する特任教員の採用と授業



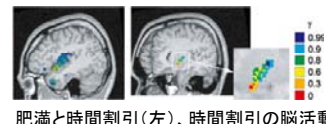
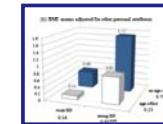
・英文校正支援、海外学会参加支援、大学院生中心のコンファレンスの開催、

研究の進展

- 1.大規模アンケート調査: 21世紀COEから引き続き日本・米国における大規模個人追跡調査実施、中国・インドにおける調査→データ公開
- 2.事業推進担当者の高い業績

・査読学術雑誌: American Economic Journal: Microeconomics, Journal of Economic Theory, Journal of Health Economics, Journal of Neuroscience 等査読雑誌掲載数51件(H21)、29件(H20)

・事業推進担当者の学士院賞受賞(2008年大竹文雄)



肥満と時間割引(左)、時間割引の脳活動(上)

国際的研究・行動経済学会

・サーチ理論、肥満と健康の経済学、神経経済学、労働経済学等の国際会議開催(2年間で26件)

・オハイオ州立大学、シカゴ大学、ランド研究所、アリカンテ大学から第一線の研究者、MITから大学院生を招へい

・ペンシルバニア大学と継続してInternational Economic Reviewを発行

・行動経済学会の創設(H19)と発展(会員数約280名)



【学際、複合、新領域】

「環境激変への生態系適応に向けた教育研究」 東北大学

本拠点は、温暖化などの避けられない地球環境変化による生態系サービス（生物・生態系が提供する人類にとっての利益）の低下を防ぐために、**生物・生態系の適応力を利用した生態系管理・保全対策を目指す「生態系適応科学」という新分野を確立し、その対策の有効性を社会一般に広めることを目的としています。**また、生態系適応科学に関する先端的研究者、更には、高い専門性と共に実践力・広い視野を合わせ持ち、保全や環境対策に関わる様々な場で国際的に活躍できる生態環境人材を育成します。

国際的研究活動

国際共同研究 49件

学術誌掲載論文
Nature 2編, Nature Chemical Biology 1編,
Nature Immunology 3編, PNAS 3編 等

国際若手フォーラム

各国から選ばれた22名の若手研究者が5日間のワークショップ期間内に論文を執筆（国際誌Oikosに4編の論文掲載）

国際フォーラム

第1回:生物と生態系の頑健性と安定性
第2回:生態系適応科学に関連する技術
(海外研究者招致 計34名)

生物多様性条約事務局との共同出版

Ecological Research の特集号を出版し、COP10で参加者に配布

環境機関コンソーシアム設立 35団体

研究成果を社会に還元し、生態適応力を活かした保管理を進めるために、研究機関、企業、自治体、NGOなどの連携組織を設立。情報共有や人材育成、実践で連携を図る。

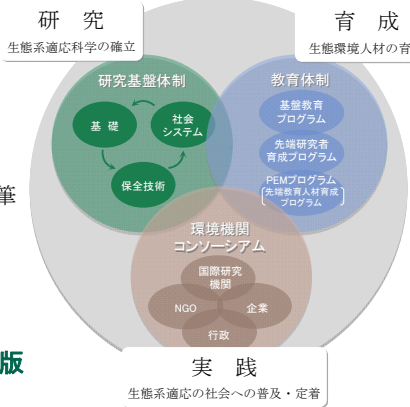
企業との共同研究 4件

オフセット研究・生物多様性評価指標開発など

共同シンポジウム、イベント等の公開講座 6件

国際シンポジウム「気候温暖化と生物多様性」「生物多様性オフセット」など

生態適応GCOE、3つのミッション



社会への普及・定着

生態環境人材の育成

- 1.生物・生態系に関連する環境分野で国際的に研究をリードする**先端的研究者**
 - ・博士課程院生による国際共同研究 13件
 - ・大学院生海外派遣 52名
 - ・生態適応セミナー開催 48回
 - ・博士号取得 26名 (就職者25名,PEM取得中1名)
- 2.高い専門性を持ち、国際機関や企業、NGOなどで問題解決型のプロジェクトを企画・運営できる**人材 (PEM: Professional Ecosystem Manager)**
 - ・国際インターンシップ派遣 11名
WWF, FoE, CBD, FAO, JICAなど
 - ・国際フィールド実習実施 (マレーシア、中国)
 - ・環境マネジメント講座
PEM取得を希望する受講者数 48名
 - ・PEM取得者 5名
就職状況:省庁1名、企業1名、研究機関3名



マレーシアでのフィールド実習 初のPEM資格認定書授与式

【学際、複合、新領域】

「学融合に基づく医療システムイノベーション」 東京大学

本拠点は、医学・工学・薬学の融合領域における世界最先端の研究開発と先端医療の現場に確固たる軸足を置きながら、多様な事業化の事例、産業界や異分野との接点、グローバルな経験を積む機会を提供する独自のカリキュラムにより、**明日の健康・医療分野を先導することができる国際的人材**を育成することを目指しています。これら融合教育の基盤として、ナノテクノロジーやナノサイエンスに立脚する**ナノメディシン領域**における研究開発を、**医・工・薬の研究者が密接に連携**して推進しています。

拠点における人材教育

人材教育構想

医療システムイノベーションを先導する人材の輩出



グローバル融合の促進

学内医工学融合の促進



拠点リーダー:片岡一則
(東京大学大学院工学系研究科、医学系研究科教授)

特徴的カリキュラム

海外サマーインターンシップ

海外に27名派遣
外国人30名受入
応募者も増大
(H22年10月1日時点)

国際シンポジウム

各国大使館関係者や企業関係者を招聘し、カリキュラムの成果を英語で発表

ケーススタディー

医工学融合チームで自らの研究シーズの社会還元プランを主体的に構築

リトリート

学生・教員が一堂に会し、1泊2日で意見交換・交流を実施

融合教育の基盤となる学融合による研究成果

ナノバイオロジー

特任: セルセラピーのためのトランスポーター解析
apical MDR1 Human double transfectant
大腸癌同所移植モデル
basal OATP1

特任: アルツハイマー病の診断
遺伝子ナノリソフ

特任: 3次元CADインクジェットプリンタ
3次元造形技術とDDSによる骨再生

ナノエンジニアリング

工業: マイクロチップ内迅速アクセスの構築
+骨分化誘導因子
細胞機能の非侵襲計測
細胞培養

工業: フェムトクロマトグラフィー
低侵襲手術支援ロボットシステム
高精度骨折修復支援システム

工業: 生体型人工関節の開発
光を利用した部位選択的遺伝子導入
高分子ミセル型DDS抗がん剤

工業: がんモデルにおけるDDSの腫瘍組織浸透性

ナノマニピュレーション 医学系 工学系 薬学系

【学際、複合、新領域】

「極端気象と適応社会の生存科学」 京都大学

地球環境変化に伴い気象変動は激化しつつあります。温室効果ガスの増大を直ちにストップできたとしても、すでに全世界で進行している温暖化影響は、今後数十年は続きます。その変動を的確に監視・予知し、その影響に対する適応策（アダプテーション）を明らかにすることを目的に京都大学の2つの研究所、5つの大学院研究科が協力して教育研究体制を組み、**気象変動とその適応策に関する研究**を推進し、この分野において次世代、次々世代までこの問題を考え続けるような人材の育成を行います。

・極端気象適応社会教育ユニットを設置

2研究所5研究科が協力して極端気象適応社会教育ユニットを設置し、大学院博士後期課程を対象とした「極端気象と適応社会の生存科学」教育プログラムを開始しました。

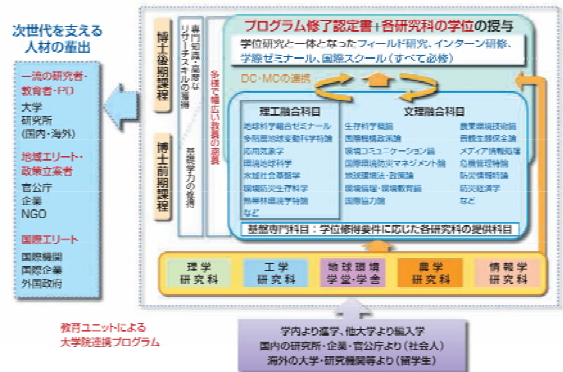
このプログラムを希望する学生は、①理工融合あるいは文理融合の講義科目群、②フィールド実習、③インターンシップ研修、④学際ゼミナール、⑤国際スクールのすべてを履修し、これらを修了することにより認定証（certificate）を授与されます。このように幅広い知識と経験を積んだ**グローバル人材**をめざす若人に、本プログラムは最良の経験とチャンスを与えます。

2010年春の教育ユニット設置より現在まで、プログラム登録大学院生は26名（他1名は就職）。文理コース6名、理工コース20名が在籍しています。

学生は、本プログラムの若手育成助成制度や外部資金等によってこれまで22名が海外国内等の各自希望するフィールドや研究拠点に派遣され、研究を進めています。

海外研究者を65名招聘し、研究交流をはかるほか、特定教員5名、研究員8名、PD研究員7名、RA22名、TA26名を雇用するなどし、研究者・教育者としてのキャリアデベロップメントの場を提供しています。

「極端現象と適応社会の生存科学」プログラム・履修プラン



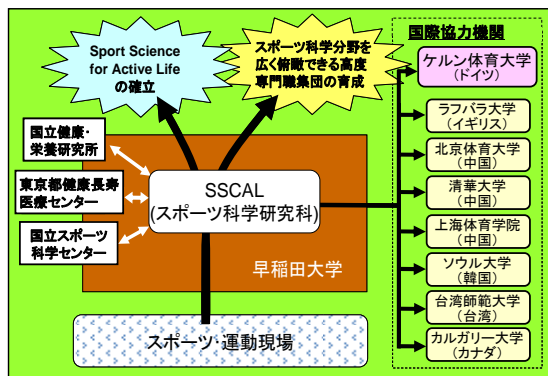
エジプト（アレクサンドリア大学、アシュード大学、国立水資源研究所）、ニジェール（ICRISAT, ニアメ大学）、ガンビア（ガンビア大学、国家災害管理局）、タンザニア（ダルエスサラーム大学）、インドネシア（バンドン工科大学、ガジャマダ大学）、フィジー（SOPAC南太平洋地球物理委員会、適正技術開発センター）、マレーシア（マレーシア科学大学）、インド（ICRISAT, デリー大学）など、海外研究機関とも連携をすすめています。

【学際、複合、新領域】

「アクティブ・ライフを創出するスポーツ科学」 早稲田大学

本拠点では、心身の健康から、人々が活力をもって生きることのできる地域や社会のあり方までも含む**アクティブ・ライフ**を目指しています。日本は、長寿世界一でありながら**要介護高齢者や中高年者のメタボリックシンドローム**が問題となっており、一方で、体力・運動能力が低下し、対人・社会関係を構築できない**子ども**が増加しています。このような問題の解決には、**スポーツ**が大きな可能性を持つと期待されることから、本拠点では、スポーツ科学における世界的な教育研究拠点を形成し、**高い専門性と幅広い知識を兼ね備えた人材を育成**します。

国内外の機関と連携した教育・研究体制



博士課程教育システム

- ・経済的支援(RA38名), 社会人教育の充実(9名)
- ・成績優秀者の海外(協力校)への派遣(本年9名)
- ・国際的ネットワーク形成の場の提供
- ・基礎的知識と実践現場への応用力の獲得
- ・充実した留学生教育(現12名), 英語による学位取得

3つの戦略的プロジェクトテーマ

I: 子ども

Ⅰ普及社会における子どもの体力低下抑止と健全育成促進



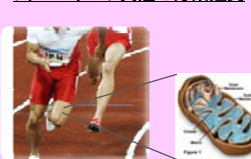
II: 中高年

Ⅱ医療・介護(社会保障)負担の軽減と中高年の生きがい創出



III: トップスポーツ

Ⅲ人類幸福の実現のためのトップスポーツ興隆の方策追究



実践フィールド: 所沢市, 体育各部(OB会), スポーツ医科学クリニック

公募要領、補助金その他の問い合わせ先

文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室大学院係
〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2
電話：03-5253-4111（内線：3312）
FAX：03-6734-3387
URL：http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/globalcoe/

審査・評価に関する問い合わせ先

独立行政法人日本学術振興会研究事業部研究事業課
グローバルCOEプログラム委員会事務局
〒102-0083 東京都千代田区麹町5-3-1 麹町浅古ビル3F
電話：03-3263-0985
FAX：03-3237-8015
URL：<http://www.jsps.go.jp/j-globalcoe/>

メールマガジンについて

日本学術振興会では、本事業を含めた各種の情報をメールマガジンにより配信しています。
メールマガジンの配信を希望される方は、以下のHPからご登録ください。

「JSPS Monthly（学振便り）」（日本学術振興会）
<http://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>